



東京

文事堂發行

西遊記

卷之一

桃川燕林口演
高島政之助速記

097094-001-1

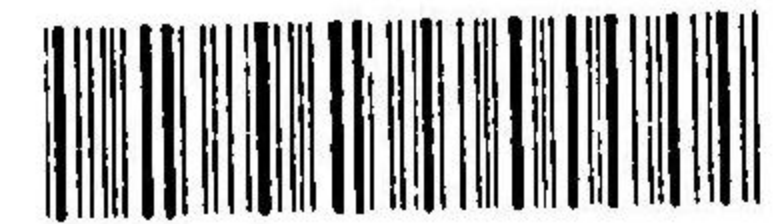
特9-941

西遊記 卷之1, 3-5

桃川 燕林 / 講演

M31

DBS-0874



抄
141

西遊記

西遊記 卷之一

桃川燕林講演
高島政之助速記

一 席

致しませぬ西遊記と云ふは元來佛説とございま
 今申すに何れも教の中文字を抜いて作りまし
 して何れも教の中文字を抜いて作りまし
 ことばをいす此中第一の立物が孫悟空とござ
 此の持つて居りませぬ如意棒と云ふ如意の如
 ございませぬ何れも杖を持つて打つてはな
 の土台でございませぬ常になんか金箍棒と云
 れて置いて小さくする時は幾千里まで屈く其
 又之を廻はする時は幾千里まで屈く其目方何

西遊記

らす重寶な棒であるものでございませうけれども男子は何れも
如意棒を音はへて居ない者はない一本づゝ音はへて居るけれ
ども中には被つた棒なきがある意の如くに如意棒ばかり厄介
にして居ても困るべしなむ……此悟空の語から申上げません
と御分りかたうございませぬ改ためて申すまでもございません
天地混沌として其古しは球の如く清めるは上りて天とあり
濁るは留まつて地となり始めて天地が分つて世界と云ふもの
を生じ茲に人を生み萬物を生じ天地人と云ふ三才に分け荷は
四大洲に分つて其國の名を東勝神州西牛賀州南瞻部州北俱
盧州と四つに分つた此東勝神州の海外に一つの國がございま
して彼來國と稱へ此海中に空に届きまする程の山がありまし
て之を龍果山と稱へる此山の麓に一つの怪石がありまして是
れ古しへの世より保つて居りましたる石でございませうたらう

西遊記

が夫が震動雷電致しますると或る時天地空気の作用と見えて
此石が別れると其中より石卵を産む石の卵を産んだ其石の卵
を産みつ放しにして誰も之を温ためてやつたと云ふのでもな
し巢に入れてやつたと云ふ譯でもなからうが自然と石猿の形
になりました彼の石猿とございませう所がさうも此猿の性情
るみとは別段に申すもございませぬ取分けて此石猿は生
立より致して隙才備はつて居りまして別に學ぶ所もございま
せんには能く舞ふふとを覺ね荷は稍と傳へ峰を馳け廻ります
みとは是は常人の得手でございませぬ追々此石猿大きくあるに
従つて其眼の光りと云ふものは尋常一様の光りではございま
せん實に驚ろくべき光りだ是れ東の方へ向いて顔を上げる時
には其眼の光り恐らくは數千里に届くと云ふ位のもので此時
玉帝寶殿にましつて多くの臣を驚め四方山の御物語をして

西遊記

御在遊ばした時に東の方に當つて影だしく光り物がする帝大
いに驚ろき給ふて玉帝何事であるかと仰せられ居合はせた
る者一同も時ならぬ光りを放つたるは何であるかと考へまし
た所がどうも分らん、スルと近傍より奏聞を致して臣所候な
時によろ豫て御手許へ差置かれる千里眼順耳風を招いで御尋
ねに相成れば必ず事柄が相分りませう又彼れ夫を見仰致しま
すれば必ら申實際の相分りませうのでございませう帝に於ても
御心付きに相成りまして直ぐに此千里眼順耳風と云ふ二人を
招いた兩將早速に玉座近く罷り出でた千里眼と云ふ男は千里
向ふが清朗に見ゆる隠い奴があらばあるもので順耳風と云ふ
のば千里先のものとが清らかに聞える小聲で語をして居ても
聞ゆる○今夜御へ行かうかなと相談をして居ても皆さ夫
が此男には分る今ヤツ云ふ人物を生捕つて何かの役に立つた

西遊記

ら嘴ぞア大層な月給でも取れることとございませう此時に
帝其所へ進み山でて玉帝其方兩人を招いたのは外ではな
東方に當つて影だしく光りを放つ如何あるものであるか其相
を相尋ぬるやう致せ、兩人之を聞いて兩人委細長ふまり奉ま
つりますると殿を離れ、ソレより一層高きに登りまして少時
あると兩人共玉座へ立戻りまして奏聞を致しました千里眼
を放つて申上るは千里眼吾れ高きに登り其光り物を改た
め候所、是は東勝神州の華果山と申する山の麓に怪石あつて石
卵を生じ成長するに従つて一の猿たり、其石猿の眼光容易なら
ざる光りを放つ、併し別段に不思議とするに當らぬ、是は石賢を
帯びて居りまするが爲に光りを悉く放ちまするものでござ
います。順耳風其所へ進み出でまして順耳風千里眼の申する
通り石猿の両眼に相違ございませぬなれども固より石賢にし

西遊記

て是まで食事をせず、且つ水を呑むとなし、依つて光りを愈々増すと雖も、今に食事をなし、尚ほ水を飲みなせ致します其時に、は白から其光りの消にまするもので、別段に腹を痛め給ふもども之無く候。と述ゆかに之を奏聞致す、玉帝之を聞召して玉帝然らば捨置け。と云ふことで、別段に何の御沙汰もなく其儘にして置いた時に、石猴は次第々々に大きくある、さうも其侍衛あること一通りてございません、けれども此奴餘り物を食はる唯木の實などは食へまするけれども水を飲まない、さうも人と云ふ者は食ふ物は少く位、通くも飲むものが二日も三日も休んで居た日には堪りませんけれども、固より石の精として出来ましたる石猴のみとて水を少しも好まぬ見角する中に山猴か又何處から集まつて来たが次第々々に集まつて来ると思ふ明友が居るゆゑ、段々親密になつて、甲さうも久しく御目に掛

西遊記

らな。と云ふ奴もあれば、乙も前は初めて會つたが何處から来たのだ。と云ふ。丙は土佐から来た。とか或は丁は私に、光の山の中に居た。とか神州にもさう云ふ所があつたと見へる、けれども角突合で、強い者勝ちで、誰が此中の頭と云ふのも、此石猴ばかり強いかと思ふと、石猴に負けないやうな功を経て居ります山猴があるものだから、常に喧嘩が絶えぬ、引合はかり、互ひに顔赤め合つて居る、尤も是は當り前のこと、で、所が山猴の中で、餘程年も老つて居て幾らか物の分ると云ふ奴が、数百の野猴を、其處に集めて會談をした、老猿さうも斯うやつて居て、頭が無いと云ふるとは、ない、無政府と云ふのは、誠に不都合な事だから、誰か此中で一人長と云ふ者を拵らへて、さうして、其者の指揮を聞いて、万端したら宜からうと思ふが、何うだ、乙は云ふまでもない、誰を頭にする、乙は俺が頭にならう

西

遊

記

老猿往けねへ〜 丙俺が頭にあらう 丁手前のやうな若の
 支配を誰が受る奴があるものか 丙ナセ〜 老猿喧嘩をし
 ちやア往けねい集まると喧嘩をする外に仕方がない茲で木登
 りをして見て早く登つたのが勝と云つた所が仕方がなし付て
 は此華果山に數千丈の淵があるやうも大淵だつてその位の淵
 は世界に澤山無いと云ふもだが考へると此淵盛の中は何う
 あつて居るものか大方私共の丁簡では矢眼一ツの所でもあ
 るか此淵盛へ飛込んで一ツ夫を探り改ためて来た番を此中の
 頭としやうじやあいか 甲ソイツは面白い 乙何うたい行か
 ねへか 甲水はいけね〜 丙前は何うたい 丙俺もいけね
 へ 甲手前は 乙俺もいけね〜 老猿皆な行なくつちやアい
 けない 甲其様な事を言ないでる前行ちやアどうたい 老猿
 俺は此國少病氣の加減で必持が惡此猿は病氣だ石喰之を聞て

西

遊

記

石喰さうさま、俺が行て来やうか 老猿行かい 石喰ア、行く
 とも遣作もない 老猿行つたつて唯淵の邊へ行つて見て来
 たんぢやア往けねい、中へ飛込んで奥を探りさう云ふ所があつ
 て何うだと云ふふんどをチャーンと見て来るのだ 石喰ア、見
 て来るとも 老猿見て来て此方等が住居になりさうな所なら
 斯うやつて山住居ばかりして居ても仕方がない何時獵人が来
 て鐵砲を向けるか知れないからさう云ふ所がめれば皆を引移
 つて一の城廓として其中を見届けて来た者を城主にしやう
 石喰俺が行かう 老猿行かい 石喰行くとも難作はさうい。石喰
 固より腕を運まじうして居るものゆゑ心得て其淵の許へ参り
 ます、外の山嶽はア、云ふやうなもの、池盛へ飛込めるもので
 はないと名々機子を見て居る其中に強情我儘の石喰はナ〜
 飛込た處が何事かあらんと思つて居る嘗人水と云ふものを飲

だみとはあゝ遊と云ふものは唯ドン／＼音のするもので何々
 云々のものか知らないから、時分に録音、録音に類被とは此事で奴も
 行成り其所へ飛込とバシ／＼ト遊だから堪りません、忽の間に
 石盤へ投り込れた其機會にどうも食つたの食はないのッて
 石盤「ア／＼」是は大變、是は驚いた奴め驚いた、飲んだこともな
 い水の中へ飛込んだ、大抵のものなら夫つきり上がつて来るん
 だが固より不思議の術を心得て居る石盤、遊盤へ落ちたのを半
 ひ石盤「ア、酷いもんだ、どうも初めて道入つたけれど遊盤
 なんてへものは澤山飲ももんちやアねへ、水あんと云ふものは
 餘さう旨くはねへ……さうではねへせ、ロイツは良い心持にな
 つて来た成程水を飲んで育つと云ふふとを聞いたがさう／＼
 是だ、ナ、此奴は飲み宜いも驚だ、と細言を言ひながらドン
 ン／＼来る、と茲に一の城廓の如きものがありまして、入

口の隙を見ても、華果山、地水、藤洞と記したる古い石が立つて
 居る、石盤「ア、華果山、地水、藤洞としてある、是は昔誰か居た
 所だ、鬼に角、鬼へ道入つて見る、とソコで奥へ道入つて様子
 見ると、取て活きたる者は少しも居ず、なれども藪とは何人かの
 住居と思ひまゐる、スツカリ見届けて立歸りまして、名々へ右の
 次第話しをする、老猿「さうか、ソレハ剛毅なことをした、ソレぢ
 やア、ソレ其處へ移らう、老猿「ソレぢやア俺が案内をしやう、と
 云ふので、再び遊盤へ飛込む石盤ばかりではあゝ、多くの野猿何
 れも遊盤へ道入りソレより其道を冒して、遂に水藤洞と云ふ所
 へ来つて此處を名々の住居となし、遊盤は山に出て遊に傳へ、梢に
 登り、空気を吸つて居ります、夜に至りますと此水藤洞へ名
 々集まり、まするやうなふと、さて約束でございませうから石盤遊
 盤に此數多の野猿の中で頭となり、王と云ふふとにして自ら美猿

王と云ふ名前を付けた、ソコで大勢の者へ指揮致して居る所が
此美猴王何ても出来るものと見えて初めの中は競争して居た
ものも仕舞いには美猴王には及ばざることを知り、之に腹従し
て居りました段々此所も開き旁々して居る中に既に三百餘
年の間此水窟洞の中に居りました所が美猴王段々考へて見る
に私も石卵として産れ一度は石壁と言はれ、今又美猴王と言は
れて斯様に多くの野猿の中で頭とあつて居た所が此華果山水
窟洞に居ても別段に世の中のみと知ると云ふことはなし世
界の情と云ふものを何うかして知りた、且つは何うぞ死にた
くはない付いては不老不死と云ふふと授ける神仙が世界の中
にはあると云ふことだから其仙人に會つて不老不死の妙術を
傳へて買いた、さうして一番何の位生きるものだから世界の
子を見たい、夫れは是非とも一つ神仙に會つて不老不死の妙術

を授けて貰はなければ、騎ら何でも限りのあるものだから死ん
で仕舞つては助らない、是は一つ早進出掛けやうと俄かに脚を
出して鎌倉があるから一同に來いと云ふので、アさうも方々
へ電報を掛ける郵便を出す電報を掛ける、と方々から集ま
つて來て、甲何たらう又美猴王何か始めるぢやア、いか時々
あの男は色々あると考へるが、乙ナ、御馳走か何かす
るのだから、柿なんぞ出さうだ、行つて柿でも柿でも食て來やうと
ドヤ、集まつて來た數千の野猿、一つ所に至ると中央の所に
美猴王椅子に見つて、チ、ブルを前にして、美猴王、諸君……
甲、生意氣な奴だ、ア諸君々々と言てる、せ何うしたんだ、乙、さ
かしたんだ、せ、美猴王、今日何れも此所へ呼んだのは外ではな
い、私も一旦石卵化して斯様の美猴王と云ふ仲間の者に言はれ
畢ばすと雖、とも願々の術を覺へ、随分無き所を結え、指に在の

て明すもどもあり併しあはれ出でたる以上せうか死ぬと
 云ふもどを一ツ断はりたいものだ 甲「オ、死ぬのを断はりた
 いとよ幾ら断つたつてソレは往けぬへぢやないか……」云、成
 程 美猴王「既ては不老不死の妙術を授かれば必ず
 人は死な、いもの類らふももあし年老ると云ふものない
 のには之に類したるはあいか一ツ是から世界を尋ねて神
 仙に會つて其不老不死の妙術を授かると思ふ付いては此水
 鏡洞も折角此通り開けて名々の住居としてあるものだから是
 は何うぞ私が歸つて来るまで預かつて置いて貰いたい留守を
 十分に居て貰いたい其代り不老不死の妙術を教はつて来
 れた又此水鏡洞に因ては前方を差よやうにするから五年で其
 術に習るか十年扱しても神仙に會はないか限りの事いことだ
 ければも併し全然會はないと云ふもどはあからうと思ふかも

是から出て行かうと思ふが何うだいソレも中に神仙の居る
 所を知つて居る者があつて呉れば直ぐに其方へ行くが誰か
 神仙の居る所を御存じはあいかい 甲「エ、さうも美猴王折角
 の仰せだが私共は神仙さんと云ふ人の居る所は知らない 美猴
 王「存せんと云ふから仕方がない是から身を立つて……」 乙「身を
 立つる 美猴王「何でもする俺は……」ソレで島の面に置れたる所で
 一ツ行つて見やうと思ふか前方は何うぞ留守居をして居て下さ
 れば宜い 甲「ソレは何で斯うなつて見ると大王が歸つて来て
 下さると極てさへ居れば留守居をする若し御歸りがあいと野
 う云ふ世の中だからドンナ者か此處へ来て此開けた水鏡洞を
 取らうとする者があるかも知れないさうか妙術と云ふのを
 習つたら明日(妙術)歸らうなと思はさいで……」 乙「ソレな
 んどを言つちやアいびねへ會談の席で酒客を言ふ奴があるもの

遊記

甲、ア、少、とも早く、船つて来て下さるやう、美候、ア、何れ
も、おさう言つて下さるなら、是から改めて別、面をして船を造つて一
其、候へ、乗つて行つて見やうと思ふ、何處と、言つて目的があつて
行く、の、では、ない、目的、の、ない、所へ、行く、のは、事、を、面、白、い、もの、だ、と
う、ぞ、皆、な、で、木、を、伐、つて、賣、ら、ひ、たい、と、云、ふ、の、で、ソ、ン、か、ら、直、ぐ、は
松、杉、の、木、を、ド、ン、く、伐、り、大、き、な、る、筏、を、多、く、の、野、邊、で、造、り、ま、し
た、竹、を、切、つて、竿、と、為、して、急、ぐ、此、筏、へ、乗、つて、大、海、へ、出、る、と、も、つ
た、所、で、名、々、驚、か、した、里、さ、う、も、氣、丈、夫、を、頭、ぢ、や、ね、へ、か、何、處、へ
行、か、う、と、云、ふ、目、的、も、な、く、船、用、れ、へ、乗、つて、流、る、乙、頭、品、を、立、て
な、す、つ、た、か、い、美、候、島、と、立、て、る、と、云、つ、て、も、別、段、に、算、木、筵、竹、を
以、て、す、る、の、ぢ、や、な、い、竹、を、取、つて、真、中、へ、立、て、倒、れ、た、方、へ、見、に、お
れ、船、を、出、さ、う、と、云、ふ、の、だ、乙、頭、品、島、が、あ、る、も、の、だ、辻、占、と、取、る
や、う、だ、然、る、處、が、圖、の、方、へ、竹、が、倒、ま、し、た、か、ら、美、候、ア、見、る、と

遊記

西の方へ行つたら、妙仙が在すかも知れぬ、いぢやア、まア、昔な何
分にも留守を願む。と、美候王、忽ちの、間、筏へ、乗、つ、た、さ、う、お、り、ま、す
ると、數、千、の、山、猿、は、何、れ、も、別、れ、を、借、み、ま、す、る、も、の、か、頻、り、に、其、様、
子、を、見、て、オ、イ、く、と、聲、を、揚、げ、て、泣、い、て、回、る、中、に、切、つ、た、る、竹、を
竿、と、な、し、岸、を、離、れ、て、大、海、へ、ソ、ン、く、ソ、ン、く、ソ、ン、く、と、流、れ
出、で、た、る、様、子、影、の、見、に、る、ま、で、多、く、の、山、猿、頻、り、に、指、差、し、を、し、て
名、裂、を、惜、ん、で、居、り、ま、す、る、様、子、美、候、王、も、ト、は、云、ふ、も、の、は、自、分、の
生、れ、た、所、ろ、を、跡、に、し、て、何、れ、も、定、め、ぬ、唯、筏、に、乗、つ、て、一、旦、此、所、
ろ、を、去、る、と、云、ふ、心、の、中、は、亦、別、段、其、中、に、モ、ウ、山、猿、の、姿、は、見、ね、お
く、な、る、美、候、王、も、ホ、ロ、く、泣、出、し、た、止、せ、ば、宜、か、つ、た、出、は、出、た、が
何、方、が、何、方、だ、が、分、ら、ぬ、併、し、何、處、か、へ、流、れ、て、行、く、だ、ら、う、此、奴、
幸、は、い、な、ぬ、と、に、は、腹、の、空、る、と、云、ふ、こ、と、を、知、ら、ぬ、此、位、取、費、を
奴、も、お、い、も、の、だ、風、の、ま、に、く、浪、の、ま、に、く、遂、に、二、十、三、日、の、間、

唯此後へ乗つて洗はれた然る所が會人の志願と違はるは
 又別段南勝部州の地方に至りまして遂に一の海岸に着した

第二席

英猴王は大陸にも風のまに／＼浪のまに／＼漕うにして一ツ
 の岸に着きましたのが南勝部州の地でございまして廻りに岸
 を助かして筏を岸に斯う寄せるを向ふの磯邊は上りました七
 八人の漁士之を見て 猿オイ見ろまア何したヤ船の上には
 が乗つてる △さうさナ猿が乗つてる ×猿が何か竿を斯や
 つてるぜ奇態さもんだ 猿何したヤ何か流れて来たのかッロ
 ともあんな筏を造つて乗つて来たものか知ら △まア見て居
 る是は奇態ださうもッロ 漁士に於ては頼りに筏子を見て居る
 と岸の所へ来て筏を寄けて磯邊を取つて荒磯の行夫さな石へ

何うやら筏を寄けました猿子 ○怖怖さもんだまア船を流
 されちやうに後へ懸さやアがつた ○何するかと様子
 見て居ると、ッッ／＼と歩いて来た △まア後と云ふもの
 は退て来ると思つたら馬鹿は歩いて来ると是は奇態だ。と猿子
 を見て居ると 英猴ヤイ ○オヤイ猿がヤイと音やアがつた
 是は大變だ化助の猿に相違ないから逃げろ。と云ふも、ッッ
 パッ／＼素早い奴は逃げたが鐘間の漁士が一人袖まつた、ッ
 カリ抱え込んで仕舞つたから動くるとは出来ぬ力があるの
 に殊に大きな猿のみとささいます漁士は食ひ殺されると思
 ふから △命ばかりは助けて呉れ。と手を合はせて拜んだ
 英猴 鐘棒め、手前の命ちを取つたつて仕方がない是れから市中
 へ出て市中の様子を見に行くんたか裸体ぢやア行けぬいから
 此様の着て居るものを脱げ ×コイツは驚ろいた猿の泥棒だ

是れは酷い猿に出遇つたと思ふ此の中に漁士の若て居た衣類を皆ん取つて仕舞つた穿いて居た半股引に至るまで皆ん取つて仕舞ふから漁士は呆氣に取られて居る中に忽ち漁士の姿になつた美猴王前は又た彼處に繋いてある船を思ふでもして何處へ流がすと承知しねへぞ手前たちは逃びやうつたつてさう云ふ時は逃がさないから然う思もへ此様なるものを着て何處へも行くんぢやねへ少しの間だ貸して呉れ俺れが思ひ通りにされば立派なるものを拵らへてやるから

美猴王尋ねるものがあつて来たんだ此の尋ねるものが此方に因ねへと云へば又たあの筏へ乗つて西の方へ行か北の方へ行か是れから行く先きの知れねへ身体だけれさる市街へ出て見おければ交はり云ふことが分らねへから付いては此近所に神仙は居ねへか

何だい神仙と云のは美猴王

仙と云ふのは仙人だ不老不死の妙術を知つて居ると云ふ仙人はさうかい

此様ものは聞いたことはない此先に灸点屋がある美猴王灸点屋を聞いたんぢやない仙人を聞いたんだ

「アア、アア、知れへず美猴王知れば吠つてるい」

さんが聞か返事をするのだ人を裸体にしやがつて酷い猿があるものだ。漁士は道々の体で逃て往た美猴王は漁士の衣服を着て魚籠と提げて市中へ出て来た姿が漁士の姿に面が赤いだけだから往來の者や何かは顔を見て甲世の中には赤い面に眼の丸い奴があるものだ猿見たやうな奴だ猿見たやうぢやない猿なんだ固より才物でございませうから腹はしい所へ来て人の應對万端の様子をスツカリ見定めて就ては何うか神仙が居るか居ないかと思ひ取らぬ事を改めた處が何うも居る

機子がさういませんければ一日や二日ではない此所に暫ら

遊記

と足を取らぬて戻りて求め神仙の所在を尋ねた所が居ないを云ふふとになつた。さして見たら居ない所に何日まで居ても仕方がある。コイツは出掛やう長く此地に居ても不老不死の妙術を知つた者が無ければ何の来た甲斐があると思ひ再び例の岸へ立戻りまして探いで置いた筏へ乗り明留を解いてドン／＼を跡に致しましたることで五十日餘りの日を筏の上を遊らし遊に西牛賀州の地に至りました。是亦た岸へ來つて漸うに船を留め上つた。モリ其時には流土の姿をして居りますから誰も得ぬ者もあつた。子時人腕を組んで考へたが是は事に依ると此處に仙人が居るかも知れない。さうも仙人が見るやうな心持がしてあつた。居れば此人に就いて不老不死のみとを一つ傳授を受けあつちやアならないと、思を離れ山に登り何れを目的

遊記

として行く所もございませぬけれども美猴王彼方此方馳騁りまするを向ふから跋を擲いて六十ばかりにありませぬ老翁がやつて来た。美猴王レレ老翁さん、老翁さん、老翁さん、私でございませぬか。美猴王お前さんに少し聞きたいとございませぬのだ。此地は何と云ふ所だい。老翁様でございませぬ。總して此地は西牛賀州の地でございませぬ。美猴王、ア若し此近所に神仙が御在なざりやアしさいか。老翁、ハイ夫は何でございませぬ。一人御在になりませぬ。美猴王、ソレは有難い餘程遠いかい。老翁、しば御目に懸つたふとばございませぬけれども此山深く御通入りにもあります。其處に洞がございませぬ。ソレが仙人の居る所だ。云ふふとばございませぬ。美猴王、ソレは有難うございませぬ。何と云ふ人でございませぬ。老翁、善提國師と云ふ御方でございませぬ。美猴王、善提國師……アソレ善提國師で、老翁様でございませぬ。

西遊記

また、私くしはまた御目に懸つたふとはございませぬけれど、御年は彼御れ三千年だとか、五千年だとか申します。が神仙のふとでございませぬから、中々俗にり分りませぬ。美猴夫、夫と極つた多、弟子共はあるかい。老さうでございませぬ。御弟子もあつて、開て居升が私し共は百姓のふとで、頼と其様もふとは精く知ませぬ。貴所が御尋ねなされるなら、是から山を西へ西へと通て御出なさい。升と神仙の洞の所へ出升。美猴さうかい。大きに有難うございませぬ。老翁さん。又其中に御禮をするよ。美猴王。此上なく喜んだ。幸ひにして神仙の居る所を聞いたのは、何より此抜梅で見ると、妙術を授かるふとがあらうとソレから、道程は彼是れ三十里ばかりも参りませぬと十一二になりませぬ。童子。大きな松の根方に腰を懸けて居たが、童子「オ、イ、北處へ来たのは美猴王と云ふ者ぢやないかい。美猴王驚ろいて見

西遊記

ると、小僧を童子が自ぬの名を呼んで居るから、此小僧化物だ。来たこともない所へ、初めて来て、誰も俺の名を知つて居る。俺は、是は小僧の化物だ。美猴、美猴王と云ふのは、俺だ。貴様は何だ。正体を現はせや。正体を現はさなければ、首を抜いて仕舞うぞ。童子「其機あことを言つても、往けぬ。御師匠様は、十一年も前から今の華果山水、深洞に居る石猿、美猴王と云ふ者が、此國へ来るからと云ふふとを、云つて御在なすつた。美猴「へエ、ぢやア、何かいふ前は、神仙、須菩提、童子と云ふ人の弟子かい。童子「ア、私は御師匠様の側に居て、其事の術を教わつて、戯いて居る。お前の来りふとは、疾うから御師匠様は、知つて居るよ。十年も前から……美猴「大變さもんだ。十さうも十年も前から知つて居るかい。早速、其處へ案内をして貰ひたいもんだ。童子「断はつて、はくが子も前は、一体粗忽で、往けぬ。御師匠様は、荒々しいふとを

西遊記

御嫌ひだ馬鹿に大嫌ひだ 美猴馬鹿に嫌ひだつて俺は馬鹿ぢやアない 童子お前は馬鹿ではあいなうだが御師匠様は然う仰つしやるけれども行つて無禮のあいやうにして何事も私しが教へて上げるから 美猴手前が教へるのか 童子私しは古く此洞に居るお前は今来たばかりだからお前が幾ら年を経つて居ても私しは取るど末弟私しは兄弟子だから是から教へるから美猴跡に尾いて御出で此小僧の畜生俺を馬鹿にしやがつて美猴々々と云やアがるけれども考へた此處で小僧と喧嘩をしたつても仕方があるいッレが爲に來たんだから須善親祖師に面會して一つ頼んで見やうと思つて又二三里の道を來ると松原と云ふから松原をございませとニーと云ふ筈の音が致します翠なを調へて居るものと見えて何となく其樂器に於ては耳を消ませます妙なものか鳴つてるア是は美猴王其儘

西遊記

に其所へ來ると童子は大音を揚げました 童子御師匠様唯今石猿を案内を致して参りました 祖師此所へ通々 童子左様あら通しまして宜しうございませるか 祖師宜いから通せ 童子ア美猴此方へ來い此方へ來るんだよ……何をして居るんだ羽虫などを拾つてちやアいけかい 美猴羽虫などを拾やアしない小僧の癖に生意氣あふとを言ふア美猴王其儘に其所へ至つて様子に至ると一座高き所に白い巖壁を胸に垂れ其年は歳幾を重ねて居るか知れざる位の翁頼りに翠を彈して居りましたが翠を傍らへ差置き其側には數十人何れも老人でございまして如何様弟子と見えて其所に扣いて居る 祖師ア、其方の來たのを待兼ねて居つた海上何の憂ひも無く幸ひにして此所へ來りしか其方は石卵にして成長の時は不老不死の妙術を好むと云ふの志し遠げれる者汝に其術を譲らんと思つて居

るあれと當洞に在つて能く其業を爲すふとを勤めて致すか又
 衆をすするふとが出来ないと云ふやうな事ならば必らず下界
 に下す美猴恐れ入りましてございます如何あるふとありと
 雖も手前不老不死の妙術を得ますの間祖師の一言を背き
 奉まつらぬ何事に依らぬ仰せ聞けられ下し置かれまするやう
 祖師「ハ、美猴併し發何の位の年齢を經ましたらば手前へ對
 いして不老不死の妙術を御傳授に相成りませうか心得の爲に
 伺かつて置きたうございます 祖師左様さ先づさうも其の不
 老不死の妙術を譲るのは千年やナ 美猴千年……さう云ふ
 ものでございませう千年生きて居られませうかナ私くしは
 …… 祖師ソレはさうも知れない生たる者は中々私くしに之
 を保もつふとも出来ず之を失おはんとするふとは易しと雖も
 も千年生きて居るかと思つて聞かれては甚だ困まる生きて

居やうと思ふたら生きて居るさい 美猴「ハ、千年に致して
 其術に至りませうか 祖師ソレは其方の勉強に依る千年經つ
 ても二十年經つても不勉強から逆も命有らん限り妙術を傳へ
 るふとは出来ぬ 美猴「ハ、ハ、 祖師又極意に至れば一日に
 しても其術を譲るふとがある 美猴左様でございますか祖師
 千年やるのも一日やるのも同じこと、志、想、一、つにすれば必らず
 一日にして其事を成す 美猴「ハ、ハ、左様なら是から勉強を致
 して學びまするやう致します 祖師付いては其方は聞は、ま
 弟であるから當洞に居る中は何事に依らず此童子の指授を受
 けなければならぬ聊かでも其旨返しをしたり又其事に違約
 するやうな事かあれば其時には其方の身体を殺にして仕舞
 うぞ 美猴「殺にする…… 神仙私くしの身体が殺になりますか
 祖師「殺にする位は何でもならぬ、若し疑いあらば此所に於て殺に

西遊記

致して見せやうか 美猴王少し御待ち下さい 妙術を得まい
前に粉になつたら何うするも出来な何事も童子始め古
の人は従つて戦します 祖師ソレで宜しいソレで其方
は美猴王なき云ふ私くしに名前を付けるは何うも怪しから
ん 華果山水窟洞に在つて多くの野猿を手下同様に致して居る
時には美猴王でも宜しいが窟洞へ罷り越して其もの修行を
する間には美猴王なきと云ふのは甚だ宜しくない 依つて私が
今日名を貴様にやる改名をさつしやい 美猴有難う存じます
私くしも何れも美猴王と云ふ名を付けたくもあいのささい
すが名々強いて呉れましたから其他に致して置きました何う
か神仙の思召しを以て何とか御命け下さいますれば有難う存
じます 祖師汝元と石猴の賢なり 依つて姓を孫名を悟空と云
ふふとにする之を孫悟空と云ふ姓名に改ためて遣はすから左

西遊記

機必得ち 美猴ハ、左様なら私くしの姓名が孫悟空有難う
存じます 大勢居ります所の仙人へ對して 祖師今日より此
石猴香が門下に至つたに付いて改ためて孫悟空と云ふふとに
致した何うぞ名々に於ても此者へ萬事を教へ遣はして貰いた
い 多くの仙人之を聞いて委細承知致したるの趣きさてソレよ
り致して此處に數百年の間居りまして孫悟空一生懸命に其道
を學び遂に此須菩提祖師より致して不老不死の妙術を得るの
一條から華果山水窟洞へ歸つて多くの野猿の敵討を致して茲
に一つの術を得るといふ追々三蔵に出合ひまする御話に相成
ります

第三席

さて孫悟空は菩提祖師の門に入りまして數十年の間能く其妙
術を學びまする又勤めて習ふものでございすから祖師に於

西

遊

記

三十二
 ても悉く悟空を愛しました其樂に至れば物食は物飲ま
 時としては飛行の術に至るまで云ふ時は實に身體を失
 かと思ひまする位難難致しまする何事に依らず困苦して
 ませんければ其極に至ると云ふことは出来ません唯器用や
 人の伶俐で真個として居るよとは永く保つものではござ
 せん孫悟空は頗る勉強家とございませるから多くの仙術に
 ても誠心悟空の勉強を感心して居る取分けて祖師は能く教へ
 勞々致しますから遠々に其道理を知り能く師の言葉を守つ
 て悪魔者の悟空であるせれどもモウ師には勝てないもので
 ると思つて居りますから勤めて茲に修業を致しましたされば
 七十二般の變化の術に至りました此七十二般の變化の術と云
 ふのは時としては虫にもなれば動物にもなる何にでもおれる
 是は中々なし得るものでござい其術を積んだる後であうては

西

遊

記

三十三
 ありません修業の曉きに至つて此變化の術と云ふのを授かり
 ました悟空大きに喜んだ祖師は近く招いで 祖師此上は汝
 に空中飛行の術を教へる是は勤めて致さんければあらん 悟
 空先生空中飛行を教んと云ふふとは聞いて居りまするが何う
 云ふふとを致しまするか 祖師夫れ即ち術にして言ふて言は
 れを言はして言はず以心傳心から成立たんければならん此の
 方百日の間寒水に浸つて居なければ往かん 悟空「ハエー百日
 の間水へ遁入つて居りまするか物を食いますか 祖師「食ふ物は
 外に水の水を咽喚に入れる時には忽ちソレが爲めに死する命
 を終りては何をして仕方がないから觀ら飲みたへも水を飲
 んでは往かんと水も飲まぬ百日勤かないで寒水の中に居る
 悟空先生の仰せとございませるが勤かまいで居る氣でも何れ谷
 川の流れが何かへ遁入つて居りまするのでは…… 祖師「イヤ」

左様なふとではあゝ此處に寒水を入れる寒水と云ふものがあつて此處の中へ其方を入れて置く。悟空へユ一壺へ遣入つて居りますと……祖師壺へ入れて上から蓋をしてさうして百日の間地中へ埋けて置く宛然池盛か焼酎の始末で悟空拾たテをさういませうな。祖師可成冷たい。悟空何うでございませう其間に凝つて仕舞やアしませんか。祖師ソレは随分修業に惜りがあると思つて壺の中で凝つて夫れありでもう形の凝して仕舞ふのがあるナ。悟空ソイツは大變でございませう何うも……祖師其方其事が都合なら致へてもやらせ……悟空何う致しまして先生の御手にありますとば皆お御傳へを願いたいと思つて居ります左様あら一ツ壺へ遣入りませう多くの仙人之を聞いてどうも彼奴も強情だが寒水壺へ遣入つたら定めし遊んであらうと機子を見て居る祖師は早速に蓋子に下知を致

して其所へ在りて大い壺でない一の壺を持參を致して瀬戸物で出来て居るかと思ひますやうな壺で併し眞黒でございませう其性は分りませう金であるか何であるか蓋を拂いますと何にも遣入つて居ない。祖師サア遣入れ此れへ……悟空寒水壺と申しませうが此處に何もございません。祖師遣入つて居ればソレから水を注すんだ。吾空左様でございませうがマア御免下さいやし御先へ。祖師何が御先だ強情我儘の吾空先生へ對しては儘に仕へると雖も其性強情を男でございませうから筈。梅めへ是までの間様々の修業をして来たんだ寒水壺なんぞつたつて其様に冷たいことばあるまい冷たいと言つた所が百日経ては出るさうして見たら其様にグツク考へるふとはあ

いと中へ遣入つて丁度當人が一人で遣入るだけの壺だ頭も出

悟空ソイツは少し冷てへぞ併し物と云ふものは此方に

氣を保つて居ねものだから遣入つて居れば其中に段々自分の
 温氣で蓋が温まつて来るさうすればナニ別段に仔細は無い物
 を食は無い位の所は承知おんだ是まで斷食を幾度したか知れ
 ない馴れて居るから當人斷食の方は恐れ無い蓋へ遣入つて居
 ると祖師は一の小さる蓋を又取出して祖師吾空サア今愈
 や水を注す必あらぬ泣くな吾空先生元陵を仰有ッちやア往
 けませんか冷めたい位の耐に堪がございませんければ仕方
 ございませんそんなものがあつても泣いたことばない食物を
 欲しい時に泣かすので祖師貴様は其徳あるとばッかり言
 つてる。タラハ少しばかりの水を中へ入れた例とへて見れ
 は蓋は水瓶の如き水の漸やう一合が五勺水を入れたと思ふ
 と何うも其の水の冷たいふれと云ふものは一通りでは無い
 う一杯になつて仕舞つた悟空は頭だけ出して悟空ッーッ、

ッーッ、祖師ッー見ろ悟空さうも是は大變だ是は何う
 なりますナ祖師師かにして居る蓋を掲げては仕方が無い是
 から蓋をして目張をして地中へ埋けるんだ悟空オーヤオヤ
 驚ろいたナ實に其冷ること一通りでない其中に蓋をする目張
 をチャーンとして仕舞つた忽ち地中へ埋けられて仕舞つた
 扱百日の間だ當人の中で死んだか何うだか知れ無い其日に至
 りますと再び其蓋を出して蓋を挑み中へ遣入つて居る悟空の
 様子を見ると強情な男だ目はかりパチリッして居る口が利
 け無い祖師孫悟空さうだ悟空ヒ一祖師さうだ悟空ヒ
 一ヒ一ッ云つてる早速に是から祖師は咒文を唱へ傍々する
 と水も碎け蓋子蓋から出してやつた悟空先生私くしは是
 で受けましたる業は一つとしてソレは樂なことはございませ
 んけれども何うも寒水蓋には驚ろきました祖師併し能く汝

耐はた是までの間此寒水壺に遣入つて百日と云ふか三日の
中に大抵は身体が凍れて仕舞つた。悟空へエー。祖師は石は
石卵よりして生じ其石質があるだけあつて寒水壺の中に百日
を保つと云ふのはもう十分だ。サア是から其方へ教へ遣はす。
云ふので、ソコで様々の法を再び教へる。昔人は固より致して妙
術に就つて居る其外に右様の法を授かつて愈々祖師が言ふが
儘にソレを覺悟に筋斗雲の術を授かつた。筋斗雲の術と云ふ
のは咒文を唱へて筋斗雲と云ふ雲を招いで之に乗る時には十
万八千里を飛行する大變な雲があるればあるもので、電気が早い
の電信が早いと言つたつてさうは往かない、一刻に十万八千
里を走る、此筋斗雲の術飛行の術を機々に教へ貰ひました。モロ
其中に吾空に於ても祖師の知る所は豫じめ覺悟しました。叔祖師
に於ては祖師吾空能く是まで辛抱を致した最早此上に其方

に傳はる術は早い早々に當所を退散するやうに致せ。悟空何
うも先生永らく御世話に相成りまして有難う存じます。御願の
申さうやうもございませぬ。就ては不老不死の妙術……祖師
ソレは其方の心に在る只其方に一つ戒めたいと云ふのはどう
も性短氣だ。此處に居ても私の言ふことは用ひるが外の者の言
ふことを用ひるがらも少しく勝ると云ふ氣味がある其方の腹
の中へ大抵知れて居る、其性を止める短氣を致すと云ふのは宜
しくない、其短氣さへ止めれば必らず不老不死の望みが叶ふ、ソ
コで今一つ言つて置きたいのに此先五百年経つと其方風災が
ある。悟空へエー風災と申しますと。祖師風の爲に一度命
終らんとする、ソレを飽く心を付けんければならん、又五百年経
つと雷災がある、落雷の爲に其方一命も既に亡すばかりの場合
はあゝ、ソレも能く心を付けんければ其後五百年を経つ

西

遊

記

に於いては火災がある 悟空火災は大丈夫で火災保険会社へ
 進入つて居りますから 祖師ソレは遠く火災と云ふは汝の身
 にあることを必らず其方筋の如く灰の如くに即ち焼かれて
 仕舞うと 悟空へエーソレをどうか渡ぐ工夫はございませ
 いか 祖師ソレを渡ぐ工夫はあるあるは是は私が渡ら
 くも教へることが出来ぬ心善良にして其時を助かることをし
 る幾ら不老不死の術を汝に授けても禍ひは逃れるもどは出来
 ん天災と云ふて是れは容易ならんまどである先づ其風災雷災
 に逃れても事に振ると火災に其方は燃けるかも知んから
 悟空詰らんことございませナ……何しろ有難う存んじませ
 祖師ソレは心ろ一つにして又た通れる時がある鬼にわれ其方
 は短氣は止どめんければならんシテ何處へ歸へる 吾空左様
 でございませ私くしの歸へませ斯るは何んでございませ

西

遊

記

果山水瀧洞へ歸ります 祖師イヤさうか汝よりは又多くの手
 下の者も待つてやあらうから然らば其方へ少しも早く歸るや
 うに致せ悟空此時に三拜九拜して足までの間師の情けに與か
 つたること一通りあらを紙に厚とけあいと思ひませるから
 を厚く纏へ多く居りませを仙翁にも一々札を述べ置子にも別れ
 を告げて物町時にして其儘に悟空仙窟を立出でたが斯う云ふ
 時と心得たるから呪文を唱へ勸斗雲を招く法に十分に授かつ
 て居りますから何を御呪ひをして居るとエーと儼かに紫色
 の雲其所へ來りませしたヒラッパと其雲へ飛乗りますと一時の
 間に十方八千里を走ると云ふ雲だ其雲へ乗つて前申上げまし
 た水瀧洞へ立歸ります悟空に於ては鬼にわれもう自分の子
 分と云ふのがございませ大勢の者が待つて居やうと思ひませ
 來りませと直ぐに華果山水瀧洞近くなりませした雲の上から見

西遊記

ある山の半腹の所に様々の木が盛ります松の木の下に縛られ
た猿が深山居り又木の梢の所から縛られて下げられて居る猿
がある雲中から此様子を見たる悟空大きに驚ろいた悟空何
だからア、やつて留守居をするものも確に驚き五年や十年俺
が居ないからと云て水濺洞は一城廓同様を所だソレが五疋や
六疋ではない数百の部下が皆を縛られて居る是は何か仔細の
あるものとだナと思つて雲中に法を結んで悟空一つの虫とあつ
た突然に其髪をして其處へ掛ないのは此男の才でござります
何か仔細があるのだから此處へ行つて様子聞いてやら
うと思つて小さな駒虫にあつて縛られて居る猿の側へ降りて
来た目にも着かぬやうな駒虫でござりますから縛られて居
る猿には分らない甲「ヤイ怖けねへな乙「怖けねへな甲「又
何だせは是であの魔王の爲に追られるんだせやう数して呉れた

西遊記

方が宜ぢやねへか乙「さうよ敷しもしやがらねへで稍々ども
するど人を追めやがつたり何かして頭が居て呉れ、ば此様ふ
とにあるのぢやねへや甲「頭はまア不老不死の妙術を學ぶん
だなんて五年も十年も歸らねへもんだらう到々此様な目録遣
ちまつたんだ何うしたエ西「何うしたつて仕方がねへ縛つた
ものには事を欠いて此様を鎖で縛りやアがつた怖けねへぢやね
へか乙「だけれども頭だつてさうぢやねへか其位の術を習に
行やうな人なら此方等が此様な目に逢つてゐるのが知れねへか
知らん甲「ソイツが分らねへのだよ猿「怖と云ふものは大抵
分つてゐるもんだナ乙「だけれども何だせ頭も始めて此方の所へ
来た時には悪戯者だ始末に往けねへ猿だと思つたんだけれど
も此方等とは違つて色々な事を觀へて大したもんだナ甲「世
うたい腹が破つたかい乙「腹が破つたつて今日で四日も食ねへ

西遊記

ぢやねへか 甲何處へ行きやアがつたんだ魔王と云ふ奴は
乙往ねへ〜 迂闊悪く言つてると聞いてるかも知れねへ 甲
聞いてたつて宜や等う殺されて仕舞ふ方が宜いや人を追りて
木の根ツ子の所へ珠散らして置きやアがつて…… 〇手
前達は根ツ子だから宜いけれど此方は振下つてゐんだ 甲
手前は魔王に悪口をしたもんだからだ 〇悪口をしたつて俺
だつて黙ちやア聞られぬへぢやねへか。悟空之を聞いて居たが
悟空何だ魔王の爲に斯う云ふ目に逢つたもろ斯うなれば仕方
がまいと思ふから忽ち呪文を唱へて多くの縛られて居る其手
下の者の前へ来てスツクツ立つた 甲「ヤア！ 此が誰か
すつた 乙「大王が歸んなすつたキャツ〜 キャツ〜」と俄か
に騒ぎ出した 悟空解かに〜 何うしたんだ手前達は「アさ
うも皆な縛られて居やアがらア何をしたんだ 甲何をしたと

西遊記

ころではございませぬ、頭ア陥るなら歸ると言つてゐ呉んな
さいよ、何日に歸ると端の一本も寄越して下されば此方では
何うにでもするのでございませぬ 悟空何だつて貴様達は縛ら
れたんだ 甲「縛られた歸があるから仕方ございませぬ、丁度
今日で十四五日にあるのでございませぬ、私共は御歸りある
まで城殿同様の所だ、此處に居れば大丈夫だ、要害も宜しするか
ら相變らぬ氣にも掛けた水簾洞に在つて頭を歸るのを待つて
たんだ、スルどお前さん来ましたのが此世魔王と云ふ奴ださう
ぞございませぬ、ソレがさうも強いの強くないのつて私共共が
二十人も三十人も掛つたつて往けぬので、さうして全体貴様
の頭とするのは何だと云ふから私等の頭は美猴王と云ふので
斯う〜 だど云つたら美猴王もねへものだ、其様を者に斯う云
ふ悪書を取られて遊ぶものか、俺が住居にすると云つて行つて

西遊記

御覽なさい、頭が折らへて置いた道具でも何でも叩き遊して自
分を王になつちまつて、化物を何處から連れて来たか皆を遣う
さうでございませうが大勢来やアがつて遣入つて居ます、私くし
其は居所がねへ位でさうして私くしあどは少し魔王に悪口し
たもんだから怒りやアがつて到頭斯う云ふ所へ振下つて仕舞や
アがつて見て御覧なさい一人残らず縛られちやつたんで逃
げた者は幸ひ助かりましたけれども逃げねへで幾らか抵抗を
した者は此様お目に遇つて居ます何うか頭敵討をしてお呉ん
なさい、悟空、ツム然うか、乙頭、敵討をして御覧なさいと
親んだつて魔王と云ふ奴は大殿に強いて、悟空、コレ、何
んか強い者が来たつて構はないもろ何んな者に遭遇したつて
負ける氣遣にはねへから……待て、今、繩を解いてやるから
甲、ソレが鎖で繋いであるので解けねへやうにと皆んな黙いて

西遊記

此々の所へ錠を下して行つたんで誰が来たつて合鍵を持つて
来なければ……！ 悟空、馬鹿を言へ、甲、馬鹿を言へつたつて合
鍵が無ければ開かねへので、悟空やつて見た所が成程鍵が無
つちやア取らない合鍵の穴の所を見て居たが、總て一本の毛を
抜いてフーと吹いたかと思ふと錠を折らへた、甲、オヤ頭持つ
て御覧なつたかい、悟空、持つて来やアしないか折らへれ……出
来る、……コイツは少し大きい。又御呪いを唱へて小さな錠を
折らへて穴の所へ突込んで、ガチン、ピチン、悟空、サア開いた
サア此錠を渡すから皆あのを解いてやつて呉れ、甲、有難うご
ざいます。と中で兄貴の猿がソレを持つて大勢の錠をピン、
ピン、開けて仕舞つた、甲、頭有難うございませう、此錠は何う
します、悟空、鍵を此方へ出せ、フーと吹くと元の通り毛にあつ
て自分の身の内へさして仕舞つた、甲、頭重寶な毛です、ね、色

々な物にふる 悟空、ロム條の身体に付いてるものは何にでも
なる、サア俺れが一つ行つて其魔王と云ふ奴をやつちまうから
甲、話しをして置きますが、ソレは大儲に大きうございませよ
ソレに力らのあるみどは滅法あるので頭は斯うやつて妙術を
使ねて御在でなさるから心配することばねへやうだが中々先
方も術が勝れて居ますから、能く氣を拵けねへと往かせん
第一雨を起しませす風を起す、ソレは自由自在のみどをするので
悟空、宜し〜 先方が強ければ強いやうに變けて見せる手前達
ちは其處に見て居る、屹度出るお手前達ちが出るど踏み殺され
て仕舞ふから 甲、出やアしません、話しをして居る所へ北の
方よりフウインと大風の吹き起こつた様子どうも小猴が驚る
いたの何んのつて 甲、ソレ頭来る〜 毎でも来る時は此
の風が起こりませす風が出たから屹度混世魔王が出るに遊ひさ

いと様子を見て居ると其一陣の暴風と諸共に疑悟の前の風
へ、メツクリ現はれたのを見てありければ身の丈は是れ一丈五
三尺もあらうと云ふ、兩眼の光り日月の如く手に大いなる威を
持つたることにして其聲大雷の如く 魔王、サア〜 汝如何か
ればこそ吾が結んで置いたる鎖を拂ひ多くの穢を助けたかも
う斯くあるからは一疋も助けるまとはあらん第一其方から先
へ殺して直ぐに肉を食うからさう心得ると行成り彼の鎖を振
上げた時 悟空、カラ〜 と打笑つて 悟空、何れ吾を殺して肉
を食ふと吐したお吾が住居どわつて居る貞水龍洞を奪ひ取つ
たる大敵汝の如き化物の爲に討たれる如き悟空にあらま覺悟
をしる。と悟空用意あしたる劍を取つてソレに向ひ習ばらくの
間と云ふものは此場に至りまして彼の混世魔王と打合つて居
る所が世には勝れたものがあるものでございまして混世魔王

遊 西

がブン／＼ブン／＼ 殿を振る様子幾ら悟空が聞いからと首の
て此殿に打付かつたらソレツ切りだ 殿を廻して居る其間に
う云ふ都合かホカ！と打たれまをると 刃に於ては八ツに割
れて其儘飛んだる様子扱はど思ふ 其中に 隙を混世魔王打込
んで来る様子に悟空も其儘に後に下つた之を木の根ツ子の所
に固まつて見て居た子孫が 甲 往けねへ〜 親分は往けねへ
せ 乙 此輩梅ぢやア親分やらられて仕舞うぞ 丙 親分がやられ
ると此方もやられて仕舞うぜト云つて出ることには出来ぬと
尙ほも様子を見て居ると悟空一廻の術を使と其儘にして姿が
無くあつた混世魔王四邊の様子を見て 魔王ヤイ何處へ参つ
たウーム 吾へ對して力向ひを爲して尙は姿を何れへか隠そ何
れへ隠れると雖も尋ね寄て、汝の肉を食はせに置くべきか
と 殿が威張つて居る中に悟空は姿を隠して置いて肩の所へ手

遊 西

を掛けて毛を敷千本抜いたが何か御呪ひを唱へると思が首の
血にあつて化蝶つた虫も蜂でございまを突然混世魔王の身体
中へ其蜂がバク／＼と附着た魔王様乃きやアがつて 魔王ア
、痛い／＼ア、痛い、と云ふ中に大さき身体へもウー一ぱい蜂が
附着つた小さき虫だが此は刺そから堪らぬ其蜂の頭を
刺そハ魔王の目の下を刺そ是には弱つて持つて居る殿も何も
持切れなくあつた何處となく蜂が刺そもんでございま其から
魔王は 魔王ウー／＼ソレを此方で見えて居た多くの蜂が
甲 ヤー頭は蜂にあつたせ 乙 蜂にあつても大變な蜂だ。魔王
も驚ろきわがつたまをで身体中蜂で埋つて仕舞た何處の嫌ひ
も 刺そもんだから混生魔王出した 魔王ヤア助けて呉れ
助けて呉れつたつて誰も助ける者があゝ其中に悟空は混世魔
王の耳の側所の所へ蜂に姿を隠へて附着いて居るがら 悟空ヤ

一吾は須菩提祖師より致して七十二般の變化の術を覺えた汝
 が力強くして劍を廻して來る時には斯の通り蜂にあつて汝の
 身體を成崩しに殺して仕舞うぞ 魔王成崩しに殺そか 悟空
 突つき殺して仕舞うのだ見て居る中に魔王の急所の邊りを刺
 したものと見へて魔王其儘にして其所へ倒れる急所を刺して
 置いてソレから多くの蜂にあつて居りまゐる毛を一つに纏め
 て元の通り之を身體へ挿した忽ちの間悟空一本の毛も又抜
 いて之に御呪ひを唱へると恐ろしい大きな鋸を拵つて魔王の
 首を其鋸でグキ／＼切り始めた見て居た猿が驚ろいた 甲是
 は重寶だ何でも出來る魔王に附いて居りました化物此様子を
 見て大いに恐れて何れも逃げんとしたが悟空中々逃がそ所は
 かい忽ちの間に殘らぬの化物を退治して其死骸に於ては谷
 間へ投げ込んで仕舞ひホソト息を吐いて 悟空どうだ 甲と

うも頭遊ろきましたか成程不思議な術を覺えて御出でまゐつ
 た 乙何でございますか其術で何にでもあるのでございます
 か 悟空何にでもある此混世魔王と云ふ奴は恐ろしい力があ
 る力ぢやア此奴には叶はねへ俺が蜂にあつて此奴の身體を突
 刺して居る中に此奴の力袋を取つて仕舞つたさうして其力袋を
 俺の身體へ付けたから是から俺の力のあることは大變だ 甲
 重寶々々何でも取つて仕舞つた 悟空サア水簾洞へ行けと云
 ふのでソレより即ち水簾洞へ來つて見ると一度魔王の住居と
 まつて居りましたから荒果てゝ居るソレを早々に手入れを致
 して住居としました多くの山猿中にも頭立つた者は 甲どう
 も大王大きに有難う存じまを貴所が歸つて來て下さいません
 ければモウ殺されて仕舞う所で美猴王威に有難うございませ
 と三拜九拜ををるから 悟空ア、一寸申して置くが俺は誰に

買つたんでもない自分で此水簾洞に居た時に美猴王と云ふ名
を付けてお前方も尊敬をして呉れたが今度は祖師の門に入つ
て有難いことで祖師が名を呉れた美猴王と云ふのは忍
れ多いから止つて依つて私の姓名は孫悟空と云ふのは是から
貴様達は大王と云ふのは構はないが美猴王と云ふのは止して
俺の姓名は孫悟空と云ふのだから…… 甲孫悟空と云ふので
……さうでございませうか好い名を御買ひませうとした就
ては何うでございませう貴所が修業した話しを何うぞ聞して
下さいますせんか 悟空宜しう名々に其話しをしてやらうと
云ふのでソレより酒宴の用意をなして水簾洞に於て悟空多く
の猿を相手にして話しを致しました切自分も暫らくは此處を
住居と致し積り多くの小猿へ對して武藝などを仕込み訓練さ
せを名々にさせて何時ぞう云ふことがあるか知れぬいから用

心十分に致して置きました然る所が此悟空不圖思ひ付いて海
底に龍宮と云ふ所がある其龍宮城と云ふのは何う云ふ所であ
るか之を見届けて來やうと云ふ所から一度海底に至つて龍宮
城に趣き計らるも龍王より致して天下に稀ある如意金箍棒と
云うものを買ひませう一條
第 四 席
成る日海面に臨んで多くの猿を相手に酒を飲んで居ると一人
の山猿が ○大王へ伺ひませう貴所は何事も御存じでございま
せう 悟空されば祖師より傳へられたることは何でも知つて
居る ○此海と云ふものは此處が龍宮城と云ふ所があると云
ふことを能く人に申しませうが龍宮城と云ふのは何う云ふ所で
ございませうか又貴所が七十二般の變化の術を心得てお在る
そつてどう云ふものでございませう此水簾洞へ這入つて龍宮城

と云ふのを一つ見届けてお出さるゝことが出来ませうか 悟
 空ハ、ハ、何を珍らしさうに聞くかと思つたら其様かどか
 其術が無い位から暫らくの間仙翁の側に居た甲斐も無い貴様
 違が云ふから一ツ龍宮の様子を見て来て貴様達に話をして
 聞かせやう天氣は好し一寸行つて来やう ○一寸一寸一寸一寸行
 けきをか 悟空ア、一寸行けるとも ○アア何うか一寸行
 つて来て話しをして聞かして下さい 悟空よし〜皆一杯飲
 んでるが宜い ○其様に早く行つて来られませうか 悟空其様
 に遠い所でもないといひ居るからと言ひながら悟空忽ち鐘
 を取出して十分に之を着用するから驚ろいたのは外の山嶽
 △大王宛然軍さにも行くやうで…… 悟空イヤさうでない
 初めて行く龍宮だから扮装の悪い奴が来たかんだと言はれた
 ら氣が利かぬへ殊に何か先方に居るか知れぬへから支度をし

て行かかければあらまい 甲冑に身を固め海面に臨んで閉水の
 法を結んだサブ〜サブ〜と進入つて行く時に多くの山嶽
 が見て居ると悟空の歩いて行く所少しも水が身に付きませ
 ん 恰かも水のさい所を行くやうあもの其中に姿が見えなくあ
 りました多くの山嶽は驚ろいた ○どうだい頭は色々あこと
 を見に来たか龍宮へでも何處へでも行く ○ウム重寶だお他
 違があん事を知つて居やうものから聞くと天妖羅を食つて亡
 くあつて仕舞う海底に入りましたる孫悟空は四邊の様子を見
 ながら追々に奥深く入りまると其どうも美麗あること紫の
 雲棚引いたることにして何となく世界の遠つて居る所目新ら
 しく心得たる悟空急いで参りまると向ふから頭へ魚を乗せ
 て二人洋服を着用して棒を持つて来ましたのが巡査でござい
 ませぬ是が巡海夜叉と稱へて何處にも矢張巡査さんが居る悟空

西遊記

の姿を見るとき二人其所へやつて来て 甲其處へ来たのは何者
だ 悟空他か他は華果山水維洞に居る孫悟空と云ふ者だ何だ
貴様達は…… 甲其は巡廻の者だ 悟空さうか 甲左様か
ら君が孫悟空と云ふて長らくの間菩提祖師の門に入つて頗る
妙術を得たと云ふのはお前さんか 悟空へエー俺が其妙術を
得たことを知つてゐるか 甲エ、もうソレは觀外が出た位で
悟空觀外が出たかさうか 甲實は龍王に於ても御身此所へ來
ること能く知り待つて居る位幸ひの御入りあり案内を致し
から同道をして行き給へ 悟空御引するのかい 甲御引ぢや
ない 悟空御引でも何でもしろ愚圖々々しやアがると片端か
ら披髮にして食ツちまうぞ 悟空此巡廻夜々に迎られまして
次第に近いで來ると此どうも萬殿の美麗あること珠玉を迷ね
錦を張り金殿玉柱とは此事あるか笙笛の調へおどに於ても又

西遊記

別段悟空此時に大いに喜こんで吾れ様々の所に至りしが求
斯様か美麗ある所に至りしは初めて流石は龍宮城ありと感服
して居る兎角その中に多くの家來其所へ現はれ孫悟空を案内
致しませるソレに選られ即ち與に通つて孫子を見てあり
ければ正面に美麗ある椅子を扣え此所に在に相成るのは即
ち龍王と相見えたり悟空飛下つたることにして三拜九禮を爲
そ龍王此様子を見給ふて 龍王汝下界に於て飛行の術を爲そ
且つ菩提祖師より致して諸々の術を得たる孫悟空と申せる者
あるか汝此龍宮に來ることを吾夢にて知れり依つて來らば汝
に與へんと思ひ待つこと久し能うこそ見えたり 悟空へ、一
恐れ入り奉つる豫て龍王のあることは承まはると雖も拜顔
をせるは初めてあり孫悟空と申せる者此上共に御見知り置か
れたく又其上に我に對して與ふる物とは如何なる物あるか

龍王、汝飛行の術ありと雖も得物として定めたる物あるべからば依つて其方に與へんとする無二の寶を此所へ出し置いたり此棒を其方へ與へる。悟空之を聞いて大きに喜こんで、
 イヤ夫れは辱しけなき所の仰せ如何ある棒あるかと心得て、
 空様子を見れば道は抑如何に龍王の御前に横はつて居る物が
 ありまして色黒くして其丸味に於ては先づ鹽油糴位の丸味が
 ある長さ彼是れ二里ばかりもある悟空暫らく見て居たが龍王
 の仰せ辱ぢけなく候得とも吾れ斯様ある長さ棒を持つて歩く
 こと能はせ龍王ハ、一如何様此儘を見て右様に思ふは尤も
 り是即如意金篋棒也如意とは意の如汝之を延どそれば延縮ん
 どそれば思儘に縮る 悟空へエー延たり縮たりと成程どう
 も不思議な棒があるもので此中に被たのはムいませんか 龍
 王被たのは無 悟空、恐入た棒だ龍王へ伺奉が此棒たるものは

如何成時に御手に入た者あるか 龍王されば此方は往古禹王
 水を治め給ふ其時に海の深淺を計り給ひし定規とさせし品延
 ばると時には上は三十三天に至り、下は十八層地獄に及ぶ大變
 棒があればあるもので延ばると時は上は三十三天に至りて下は
 十八層の地獄に及ぶと云ふ妙だ 龍王又縮める時には僅か二
 三分の針の如くにあり常に耳の中に之を藏し、用ひんとする時
 は是が心の儘にある、これが故に如意棒と云ふ其目方十八万三
 千五百斤ある。ヤ、悟空此上なく喜こんだ 悟空ハ、一辱けあし
 と御傍へ行つてソレある所の二里もあらずと云ふ飲の棒へ手
 を掛けたること致して持上げやうとしたが中々に持上がる
 様子もまい、龍王此時に至つて悟空を側近く招いて茲に呪ひを
 授け給ふ、悟空心得てソレを覺え、心の中に之を唱へまると其
 十八万三千五百斤もありまるとものが輕々と持てる、此中に悟

西

遊

記

空之をシューと延ばすと延びるはく又之を縮めんとする時
 には悉く細く小さく相成りまして遂に二三分の針の如きも
 のにあつた三拜して之を左の耳の中に納め飛退りましたるこ
 とにして悟空誠にどうも龍王の思召し辱しけなく斯る珍棒
 を賜はつたり。チンポツは名々賜はつて居るけれども三十三天
 へ届くと云ふチンポツは澤山無い尤も地獄へ届くのは幾ら
 もあるさうで……其後悟空へ對して様々御尋ねがあるど一々
 答へる愈々進めまゐる其中は多くの女官其所へ出でまし
 て何れも美麗ある服を着用して居る頭には冠、綳、河豚、是は門
 番でございませければ龍王に別れを告げて其儘に歸つて来る、此
 こんで酒宴を爲し龍王に別れを告げて其儘に歸つて来る、此
 方は水簾洞にては。○どうしたらう頭はまた歸つて来ねへあ
 △あんなことを言つたつて往けねへ、既互ひに外のものには

西

遊

記

るかねへが水づと来たたら往けねへぢやねへか ×さうよあ
 水は熱いだからあ、龍宮へ行くとき云つたが行けねへかも知れ
 ねへ。○さうよあ、事には依つたら土左かあ。ザツツ、浪を蹴
 立つて来るものがあるから海はど思つて見ると悟空、今歸
 つたよ。○御歸りませいまし、何うも吃驚して仕舞つた。△と
 うでせえ、分りましたか。悟空、分つたどうも龍宮城は別世界に
 相違ないが大層綺麗あ所だ。○さうでげまかい、ソレはまア結
 構で整らしいことございましてしたか。悟空、色々馳走にもあり
 龍王にも面會をして兄弟同様にあつた。△兄弟同様にあつた
 ございませまかい。悟空、少と此方へも遊びに来るが宜いと言つて
 来た、ソレから乙姫と云ふのに逢つたけれど此奴は又美しい女
 だ何んでも柳橋遊りに居たんだらう、是は素人ぢやアかい。○
 遊妓でまかい。悟空、まアソレあものだらう、マサカ淫賣でもあ

西

遊

記

からうが、王龍おうりゆうが助すけだから喜よろこんで女の側そばに居ゐる。○「さぞ細
馳こ走はがおりましたらうか。悟空ごくう魚いさなばかりで弱よわつちまつた出る
物ものが憎にくんか魚いさなだ是これれぢやア餘あままり食くにくいから野菜やさい物が
あるかど旨うまいつたら其その野菜やさい物の高たかい値いこど、此この方は魚いさなが高たかくつて野
菜やさいが廉やすい、向むかふはどうして大おほ根ねの大おほきいのは一本いっぽん十五じゅうご兩りやう位ばいと
○「へー面白いもので。悟空ごくう精せい進しん場ばうをして飯いひを食くつて來きた嘘うそば
かり吐ついて居ゐる。悟空ごくう時ときに手て前まへ達たつちに見みせるものがある。○「
へー何なにんで。悟空ごくう龍りゆう王おう吾われれに如ごとく棒ぼうを呉くれた。△「へー如
意い棒ぼう。悟空ごくうソレはどうも賣うたか、貴あなた様さま達たつちにも喜よろこんで買かはう
と思おもつて持もつて來きた。△棒ぼうをども持もつて居ゐるぢやありませ
んか。悟空ごくう耳みみの中なかに退ひ入いつて居ゐる。△耳みみの中なかへ……御ご見みせませ
ぬ。悟空ごくう取とり出して見みせると。△ソッソ、小こ樹じゆ子しの折お見みたやうさも
ぬが何なににもありやアしませぬ。悟空ごくう是こゝが其その如ごとく金かね篋けつ棒ぼうと云いふ

西

遊

記

のだ、目め方かたの重おもいこと十八万三千五百斤じゅうはちまんさんごひゃくごじゅうごんある。△巫ま山さん鳳ほうちやア
狂くるけませぬ、十八万三千五百斤じゅうはちまんさんごひゃくごじゅうごんあるものが耳みみの穴あなへ通と入いるも
ぢやアございませぬ。悟空ごくうソレが法はふだ、貴あなた様さまは何なににも知しらぬへ
で持もつて見みる、持もつて見みる。山さん猿えん奴やつ之のを聞きいて笑わらひながら受う取とつ
たが持も切きれぬ、ドーンと落おした。悟空ごくう何なにをどるんだい、酷こついこ
どをしやがつて折おれて仕し舞まう。△どうも小こせへ舞まに馬ば鹿かに重おも
いこと、中なか々々持もつてやアしねへ。悟空ごくう十八万三千五百斤じゅうはちまんさんごひゃくごじゅうごんあるのだ
△十八万三千五百斤じゅうはちまんさんごひゃくごじゅうごん、へー大おほ變へんあるものを買かつて來きたねへ。○「
此こ小さいものを何なにうどるのございませぬ。悟空ごくう是こゝは如ごとく棒ぼうと
云いふのだ、如ごとく意いの如ごとく俺おれの了りょう筋しん次じ第だいでコイツを三尺さんせきにして
使つかはうと思おもへば三尺さんせきにある、一丈いちじやうにして使つかはうと思おもへば一丈いちじやう、十
里じゆり二十里にじゆりに屈まかせやうと思おもへば屈まくのだ。○「十里じゆり二十里にじゆり……
悟空ごくうソレどころぢやアぬ、愈い々々屈まはせ時に上かみは三十三天さんじゅうさんてんまで

西遊記

届いて下は十八層地獄に至るので焰魔が愚圖々々言へば擲
殺して仕舞ふ ○此物の序でに延ばして見せ下さい 悟
貴様達がさう云ふから延ばして見やう 何か呪文を唱へて
つて居た捻つて居る中に段々此棒が大きくなつて来た
ヤ一頭は棒を恐ろしく大きくしやがつたせ X是は中々堅
あつて来たね 兎角その内に延ばしたりやあ、三十三天へ届く
も知れん程雲間に入る位延ばした ○頭モウ深山でござい
そ、サウ大さくされて堪るものか 縮めて従前の通り針の如
くにして再び耳の穴へ入れて 悟空何うだ、七十二般の
術空中飛行をせる又勦斗雲に乗つて一時に十万八千里を走
と云ふ不思議な術も授かるし、ウ斯うあつて見ると世界に
と云ふ者は一人も無へ無へが併しまだ化物が多く住んで居
所がある、其化物が此方へ来るやうなことがあつてはあら
油

西遊記

断して居て万一此水龍洞を外に着に取られるやうなことがあ
るとあらん故、是から閑があつたら名々閑線をしる俺が軍
教へてやるから、皆十分用意をして置くが宜い何時事が起
るかも知れねへから、今の中少し習つて置かなければ往け
ソコで多くの猿に於ても承知して、ソレからと云ふものは
あれは悟空自ら武藝を教へる法を使ふことを教へまそ、何
ら何まで教へる又能く覺える、覺えたかと思ふと直ぐに思
仕舞う、さうも悟空も罷りいて 悟空、手前達は何うしてさう物
覺えが悪いのだ、教へた時は覺えるが直ぐに思れるぢやねへか
△ソイツがもう三本毛があるぞ 宜いのだが毛が三本足り
ものだから……。けれども度毎やつて居るから仕舞には
あを能く致そやうにあり、又置らくの間水龍洞に降りまし
所ろへ成る日のこと小猿遊ろいて奥へ参りまして 小猿頭天

上より勅使として太白星が御出にまじりました。悟空は二勅使が来た、ソレは何うも一大事、一同の者静かにせんければあらんと俄かに之れを静め、勇々として居りまをる、暫らくすると太白星悠々として冠裝束を帯して此所へ罷越し、悟空に面會をして玉帝よりの勅諭を傳たへ一度は悟空を天上へ案内を致しまをる、

第五席

孫悟空に出迎へ奉つる、太白星悠々として入來りました、其所へ扣えて居たみ多くの小猿は何れも低頭平身致しまをる様子、太白星懷中より勅諭を取出して孫悟空に告る、太白星玉帝北方の飛行自由にして神術に達したることを聞き召され、此度天上に召て官を授け給ふ、識しんで御受致せし。と讀終る時に悟空三拜九拜おしたることにして、悟空玉帝辱じけまぐも吾を官

に就かしめるは何より此上の位に有難き仕合せあり、又太白星此所へ勅使として御降り下し置かれたる段辱じけましと躍り上つて悟空をこんだ早速に酒宴の用意を致そ、太白星は太白星少しも早く天上へ至つて玉帝の龍顏を拜し伺は此職に就くやうに致したが宜しからう。同道を致そと云ふことにありまむして悟空早速支度を取と外山の猿が、又頭何處かへ行つて仕舞ふのがねへ。△どうか何分早く歸つて来て貰ひたいもんだが、悟空イヤどうも今度ばさう住かねへ召出しにあつて愈々官に就くのだ。○頭あんどは剛毅あもんだね、何をもやるんでね。△何でございませう、其官に就くと云ふのは………悟空御役人にあるのだ。△御役人に………剛毅ことにあつて仕舞つたね。△どうか御役人にあつて何でもお前さんの旨ふよとが通るやうにあつたら一切税あんどを無くして貰

ひたいもんだね 悟空其様おことを此處で言つたつて仕方が
 かい思から行つて見んければ分らない Xさうで御座いませ
 かいどうかマア斯うやつて御世話にあつたもんだから愈々お
 前さんが何でも出来るやうにあつたら賤賜御免どか何と云
 ふやうに…… 悟空歸らぬことを今から願うお併し水際洞
 は貴様達に預けるから今度化物でも来た時は必らず其事を報
 知しる何時でも来て俺が退治てやる ○頭其様お無理おこと
 を言つたつて仕方がぬいお前さんの所へ行ければ宜いが行く
 ことば出来ぬい 悟空電信でも掛ける ○電信は此方にはあ
 いのでお前さんの方で時々見廻つてお呉んぬさい 悟空宜し
 く天上に居ても二月に一週三月に一度づつ降つて貴様達の
 様子を見てやるから心配するお…… 大きに太白星御待遠うで
 サア御一緒に参りませう。ソコで悟空は太白星と共に遂に天上

に至りまゐるはや關門の固めも速やかに通り其中に靈符殿に
 至りまゐる然る所下界より致して孫悟空を同道して太白星の
 戻りしと云ふこと玉帝喜悅めから龍顏を拜すること許
 されました悟空尊拜し奉まつる尤も東西に居流れて居りま
 せ者は何れも高官の人と相見あまを其中の一人其所へ進み
 役人如何に悟空今日より其方に弼馬温の職を授ける左様相心
 得る勤めて其職を致さねば相成らん悟空頭を下げて 悟空有
 難い仕合せ弼馬温の職をお授け下さる段謹んで御受致しませ
 易々と受合つた受合つたと云ふものは悟空はソレ術は心得て
 居るけれど官職のことは辨へませぬ弼馬温と云ふのは馬を
 養ひませる役で極く下官でございませ直ぐに是から自分の官
 舎に至りませる一人ではぬい仲間も大勢居りませるし上役を
 勤める者が一人ある多くの馬を御ち養ふ悟空も暫らくやつて

居た知らまいと云ふものは宜いものでございませぬ所がござうも
 考へて見ると天上に來つて右の役に就いたからと云ふて自分
 より上の者は大勢あるが下の者と云ふものはまい才智の悟空
 だから考へた是は考へて見ると此役は餘り良くはまいぞ一ツ
 聞いて見やうと思つて或る一日相役の者と二人日あたりの良
 い所へ足を投出して話をして居る 悟空時にお前も私も此
 彌馬温だが彌馬温と云ふのは是から全體と云ふあるのだい
 是から何うあると言つたつて彌馬温は彌馬温先づ是から勤め
 てさうさか玉帝の女官の御者にでもあるのが精々だか 悟空
 へさう何うだいな政治や何かへ口出しは出来まいかい ○何う
 して其様あことが出来もんか 悟空「子分の奴等から殿の生
 れて來たんだ皆お税を止して仕舞つて難儀を許るして賭博を
 許るさうと思もうんだ ○元錢を言つちやア往けまい此様あ

ことあんぞは逆も往けまい 悟空「ナ見ると此役は何うも良
 い役ぢやアねへのだか ○良い役どころか私しは斯うやつて
 勤めて居るけれども勤めて居た所が月給を待へて御覽なさい
 七圓五十錢だ 悟空「俺は六圓しきやア取れやアしさい、六圓で
 賄ひを引いて積金を引いて仕舞うと喰込みばかりだ斯う云ふ
 ことと思つて來たんぢやまい、上官あんぞは餘程取るかい ○
 上官は取る中には八百圓位取る 悟空「八百圓取る奴があつて
 六圓取る奴もあると云ふ餘り遠うぢやまいか俺は八百圓の方に
 して貰はう ○して貰はうッたつてさうは往けまい、ソレはお
 前無法と云ふものだ 悟空「無法も何もあるものか、面白くもあ
 り、彌馬山水濼洞に居れば一城の主だ、ソレを太白星が來て石
 出して官へ就かせると云ふから有難うございませぬと云つて來
 たんだ、ソイツを御覽彌馬温あんぞ語らねへ俺はもう此様あ所

には居ねへ是から一番行つて談じてやらう談じてやつて俺の
 首ふ通り月給の二千圓も呉れて上等の馬車へでも乗つて歩け
 るから宜いけれども、ソソく歩きで月給六圓と来た日には僕
 れッポイヤや牛の糞込も食へやアしさい。悟空のことだから堪ら
 ない、サア腹が立つとソレを少しも納めて居ることが出来
 面を眞赤にしやがつた、此時赤くしさいッたつて平常から赤い
 んだけれども忽ちの間無符殿へ出て行つて門を這入らうと
 ると門守の者が 門守「コレ」何處へ通る 悟空「ナニ
 門守何處へ通る 悟空何處へ通るつたつて、あの役人の野郎に
 用があつて来たんだ 門守「ソレは往けないお前のやうな下官
 は此門から内へ這入ることは出来ぬ 悟空内へ這入ること
 が出来ぬッたつて日外来た時に這入たぢやねへか 門守「ア
 レは太白星が案内をしたから這入れたのだ、一人ぢやア中々斯

う云ふ所へ這入る身分ぢやアない、怪しからんことだ 悟空
 何が怪しからないのだ筈、此方が鐵壁能く水濺洞に居る
 者を宵に就かせると言ふて能く連れて来やがつて何だい、ソレ
 で六圓の月給で騎馬温と云ふ役は始めて聞いた御殿だ、厩の馬
 丁あんぞに誰がある奴があるものか、サア通さなければ打捨つ
 ちやア置かねへぞ片ッ端から捻つて仕舞うぞ 門守「是は亂暴
 浪蕪の奴だと思まぢの間に門守の守衛に於ては其所へ來つて悟
 空を押出さうと思つて悟空は守衛を掴んで投つて仕舞つたス
 ムと大勢の守衛出來つて悟空を押へやうと思つて、悟空怒つて
 から堪らぬ長さにして、右の次第を申し容れたることゆゑ
 一丈ばかりの長さにして、右の次第を申し容れたることゆゑ
 いまさら何うも驚ろいたのか門守の守衛でございませぬ
 の間に奥へ這來りまして右の次第を申し容れたることゆゑ

西 遊 記

くの官吏之を聞いて大きに怒り且つ遊るき様子を見る所へ極
 空忽ちちの間だに雲霧殿の階段の所へ降り大膽を揚げたるそ
 とにして 悟空サア出る今日から俺を大した身分に取立つて
 上官へ進めると云ふから宜し、今まで通り麻馬丁にさせて置く
 から此様か所ろには居ねへ返答次第で片ッ端から首を抜いて
 灰吹にぞるだ酷い奴が来やアがつた、面々大いに驚いて 殺人
 是はしたり不敬かり悟空汝下官の身分として此處に入來る
 のではまい 悟空離れが下官にして呉れと言つた手前の方で
 勝手に下官にしたのだ下官も上官もねへ俺の兄弟分は中村芝
 既と云ふのがあらア、サア勘辨があらねへ。と云ふと悟空忽ち
 の間だに雲霧殿の高欄の邊りをガタ／＼叩き進み、ソレ亂暴を
 御たらしく、狼藉をど云ふ中に悟空散々に亂暴をして 悟空サア
 ろう行く是れから歸へる雲霧殿を荒らした亂暴をしたと言ッ

西

遊

記

たと音つて攻めるから何時でも攻めて来い何時でも應對を
 るから逃げたり隠れたりするのぢやねへや馬鹿にしやがつて
 其のもんぢやねへや神田ッ子だいな鼻ッ柱の強いなだど散々に
 蹴して踏も掛に大きな栴檀の木がありました其栴檀の木根
 つ子の所へ来てサア／＼小便をしたさうも彼奴は驚きもそ
 ると小便をして登かあいののでソレなりに筋斗雲を呼んで此
 雲へ飛ぶと忽ち下界へ降つて仕舞つた 悟空今歸つたよ
 ○オ、願ひ願ひ願ひ今度ア滅法早うございませしたネ、まだ百
 日にもありませんか 悟空百日居て堪るものか馬鹿にしやア
 がつてお説教が出来ねへや ○何を怒つてるんで 悟空冤罪奴
 下官だ馬鹿と云ふのだ ○ソレは結構でございませ 悟空
 何が結構だ何にも手前達には知らねへからだ馬鹿と云ふのは
 馬鹿を養ふのだ下らねへ役を言付けやがつて…… ○官員にな

西遊記

つたんだから大方月給などは大變でございませう 悟空六圓
 だいたい ○一日でございませいかい 悟空 籠絡め一月で六圓だ
 ○先方で食つてかい 悟空 自分で食うんだい ○フヤクソ
 イツア 四止した方が宜い 悟空 止したから歸つて来たんだ何
 んなことかあつたつて官員なんぞにはならねへ俺が何にも知
 らねへと思つて太白星と云ふ男も人間は良い男だが除り馬鹿
 々々しいぢやねへか六圓ばかりで人を雇やアがつて………けれ
 ども俺は歸り掛に乱暴をして来たから事に依ると天兵が降つ
 て来るかも知れない降つて来た時に降参をせよのは氣が利か
 ねへから平常剛練をしたのは斯う云ふ時だ何時軍をしたつて
 負けねへやうにして呉れよ ○宜うございませとも彼奴等が
 サツ云ふ丁簡なら負ける氣遣ひはございませんから御心配な
 さいませんな 悟空 陀度やつて来るからと忽ちの間に數万の

西遊記

猿を集めて十分に訓練をせよと云ふもソレは何から何まで器械
 が揃つて居る時に御前は別れまして天上に於ては既に孫悟空
 の亂暴狼籍之を此儘にして置くに於ては此上共に如何なる魔
 王の此所へ来るも知れませ又不敬をなしたる者を其分に捨置く
 に於ては王位の劣るへる所とならん玉帝悉とく御憤はり遊ば
 しまして怒まぢ天兵を此所へ十万人と云ふものを降し出して
 茲に戰鬥を致しませるければも軍の御話別段に面白くもご
 さいませんから大層をして申上げませ十二度の戰鬥を致した
 る所が十二度とも悟空の奇才爲せる計畧に陥りまして悉とく
 天兵に於ては敗走を致せ仕方がないから殘兵を集めて再び天
 上に歸り御座臨を遂げると云ふことになりましたと云ふ此方
 が人数を殖やして行けば先方も段々人数が殖ゑる器械を此方
 から持つて行くも先方の奴が眞似をして器械を推らへる何を

しても何うも叶はない始終は勝ももるだらうけれども目下さ
 う云ふことをすれば多く兵士を失はなければならぬソコで
 許隙をそと太白星玉帝の御側へ進み出で太白星はもう仕方
 がございませぬ願ひは願ひ者のやうにして欺きより外に仕
 方がないもので悔空問より性短氣ではございませぬが又此方
 で言ふことは船く聞くと男でございませぬで唯今より孫悟空へ
 して發天大聖の宮を御遊しなされませソレで改ためて此の度
 上官にして之を手許へ召し出して發天大聖と云ふことに相成
 れば必ら彼れ兵を纏め給ひて天上に來り御奉公を致すに相
 違ございませぬ欺して使うより仕方がない名々之を聞いて成
 繼是れは一廻あるどころさうして假いて様々に道を教へ頼
 をしないやうにそるの外仕方がないからと妄聞をそると玉帝
 に於いても之れにせいと云ふことに相成りましてソコで聞れ

が使者に行くと言つた所が何うも大抵な者は行かない來れば
 引攝かうと思つて待つて居る所へ迂迴り行く者がないヌルど
 太白星が 太白星拙者が申入れたるもの、僕が行つて一つ大聖
 の官を授けると云ふことを申し既いたら説けんこともなから
 うから行かうと云ふことになつた人をも連れ唯一人、忽ち
 の間天上を降り出したることにして水濺洞に至つた、甲頭が
 來ました、悟空、何だ、何が來たんだ、甲、日外來た太白星が
 來たんで、乾度問課でございませぬ、何うしませう、大勢で引攝
 せうか、悟空、待て、無闇に引攝いちやア詮けない、太白星と
 云ふ男は分る男だから何か又用があつて來たんだらう、武器を
 持つて大勢で押して來んだらう、應戦もそるの、當り前だが、
 一人で來たものを大勢掛つた所で仕方がない、此方へ通せ、
 つて話しをしやう、水濺洞門外に來つて太白星を發、太白星

西遊記

孫悟空に面會を致したい。里此がへかいで、頭は符つてゐるんぞ。から、何うも飛んでもねへこつた。私等の頭を天上へ連れてつて、既の馬丁にしたつて、本統に附えや、頭は怒つてゐるぜ。太白星、私の丁簡でしたんではない。案内に連れて其所へ通ると、倚子に凭つて居りました所の悟空。悟空、是は太白星でござつたか、御出迎をせよ。のだけれども少し事務多忙にして……。生意氣を言つてる。吾又之に應暇をして居る際、一人で来られしは如何なること、要件を述べて貰ひたい。太白星、扱悟空君は唯一圖に怒つて天上を悉く荒し、亂暴を働いた。是は甚だ怪しからん。譬へて見れば、天上に於ても最新から君を上官には何分にも進めること、が出来ぬ。是が規則だ。如何に才勝れたる者と雖も、一區は上官に進めると云ふことは出来ぬ。だから追々に登せて……

西遊記

て、ソレで始めて上官に至る。依つて君が亂暴さへ働らかなければ、疾うに上官になつて居る。悟空、フォーム。太白星、愈々上官に進めやうと云ふ時にソレを待たせ、唯馬温は思だ、下官だからと斯う言つて亂暴を働らく。ソレを何う致しても聞かない。到頭門を壊し守衛の者を打ち、甚だしいことをする。甚だしいことをしたから、天兵之を討たんとする。然るに貴公が勇あり、智あり、應戦をして、天兵を愈々破る。賊にソレではどうも罪を自分で重ぬるやうなもの。此度拙者の来たのは、モウ追々に出世をさせたい。誠とにせうも玉帝に於ても君の妙術に達して居る所を愛さるゝゆゑに、天大聖の官を授ける。ソレならば別段に申す所はない。からう。悟空へ、一併しソレは月給何の位めで、太白星、遊ろいな。此、奴月給ばかり聞いて居る。太白星、ソレは三百圓。悟空、六圓より少しは宜いね、ソレから何うなる。太白星、ソレから追々

出世をして任舞には八百圓にも千圓にもなる只筒を賜はるや
 うなことになる悟空さうでもかいソッハは氣が付かなかつ
 た私は一概に生涯御願で朽るものだと思つたからソレからま
 ア太白様の前だけれども大きに亂暴をして済まなかつた此上
 何分宜しく御願み申しませ太白星ソレでは一緒に行かつし
 やい悟空ヤア手前達もう軍アしたつて往けねへ今度は本統
 の官員になつて仕舞つた上官だ 甲頭宜うかそかい 悟空大
 丈夫だ……太白星御同道申さう 太白星一緒に同道をさつし
 やいだが今度は天上に至ると雖も物を聞かないで亂暴をし
 ちやア往けなないチャインと逆警罪なんぞと云ふものがあるか
 ら……悟空其様なものがあのかい私は知らないから強に
 降るとやツつけるんでサウ云ふこととは知らなかつたサア出
 掛けませうと茲で水濺洞に於て再び別れを告げ一同の小猿を

第六席

殘して留いで太白星孫悟空と同道を致して天上に至り再び茲
 に玉帝に拜願を致すと云ふ一條

悟空は再び天上へ召され齊天大聖の官を授けられ並びに蟠桃
 園を守護致との役を兼ねられました此蟠桃園の守護と云ふの
 は園に三千六百株の桃がございませ中には三千年のもあれば
 五千年のもある八九千年経つたるやうな古木がございません
 大切なること一通りでない若木の方はさうでもございません
 がもう九千年からの桃なと云ふものは澤山あるものではな
 い依つて玉帝へも悉く大切にせられ居る故に其取締の
 役を置きませる位所が悟空は齊天大聖と云ふ官は授かるし右
 の取締をして居りませ自分一人で廻るのではない部下の者が
 始終桃園を廻つて改ためて居りませる自分は日の中に一度か

二度見廻りさへすれば宜いので、大きに管人喜こんで、儼も尻の馬丁は酷かつたが今度は宜い盃梅だ此工合で行くとモット出世をそる時々露れなくツちやア控かねへ、一日棒を提げ帽子を被つてノソソ〜園へ参りまそと向ふから女官十四五名、各々に美麗なる籠を提げ来りまそる 悟空、控かね〜其處へ進入ツちやア。悟空色氣のない男だから女官だからと云つて決して遠慮はない、勿論濫りに入るべからまとしてある所だ 悟空、何だつて其處へ進入つて来たんだ 甲、是は御役園でございませが御苦勞に存じまそ私くし其は徒らに此園へ進入りましたのではございません 悟空、へエー 甲、王母より敕命に依りました此所へ参りました、貴所へ一言御届を致さうと思つて此所へ来ました 悟空、ハ、王母……何だい其王母と云ふのは 甲、是はしたり、貴所王母を御存知ないとは…… 悟空、ハ、御存

知らないのだ 甲、王母の御母様で 悟空、ア、阿母か、ソレが何をした 甲、俄かに今日桃園で不老會を御催しになりまそに就いて九千年以上の桃、其の外五千年三千年の桃の實を取ると云ふことで、ソレを貴所へ申上げて置さまを 悟空、ハ、何だい、其桃園で不老會をそると云ふのは…… 甲、是は三千年に一度あることださうでございませ、ソレ程の大事を俄かに御催しになるのも如何でございませ、王母が急に御思ひ付きになりましたソレ故諸方へ使者を走らせ、電信を掛け、電話で呼び…… 悟空、重寶になつたネ、此方はどうも……フォーム 甲、ソレで御密様が御田になる其前に備へて置さまを 悟空、さうかい、ちやア何だね、御客が来るから其桃を客に出そんだ 甲、さうでございませ、悟空、桃を出して食うかネ、桃を食うのは俺ばかりだと思つた 甲、イエ、若い木はさうでございませ、五千年以上の桃を持つて

参りまじ、モウ一千年からの桃の實を食へませれば千歳を保つ
と云ふ……… 悟空、オツと一寸待ちな、九千年経つた桃の實を一
つ食うと千歳を保つ……… 深山あるぢやないが 甲、何う致し
して九千年からの桃と云ふものは深山と云ふは九千年からの
に願う一つか二つ残つて居りませぬ、たしなものを左様せられ
四五本しらせざいませぬ、たしなものを左様せられませぬ、ソレ
が其珍客への饗應でございませぬ 悟空、成程珍らしい物を食は
せやうと云ふのだ、其客と云ふのは何んな者が来るんたい 甲
左様でございませぬ、今日御出になりませぬのは西天の佛光菩薩、南
方の南極観音、東方の崇恩聖帝、北方の北極絳觀、其外數々の尊
でございませぬ 悟空、ソレも皆な上等だ、所が悟空根が假無
な奴だから考へたさう云ふ者が集まる會なら俺も招んで呉れ
さうなものだ、齊天大聖と云ふ上官に至つて居るもんだ、ソレを

招ばないで觀音だの菩薩だのへ其桃を食はせやがる、待て俺も
一ツ不老不死の妙術を授かつて居るとは言ふ條、丈夫の上には
丈夫にして置くのが一番だ、どうも俺は死にたくない、是は一つ
九千年からの桃を食つてやらう 悟空、ぢやア少し女官達待つ
てあさい私が一通り改めて来てさうして女のことで上に揚
がることは出来なからうから俺が方々してやるから……… 甲
さうでございませぬか 悟空、後から尾いて来るが宜い、ソレから
此女官を連れ、悟空園の奥へ参りませぬ、別段に鉄柵を結んであ
つて中々嚴重にしてある 悟空、是かい 甲、ソレでございませぬ
よ 悟空、是は何うして女には登れない、けれどもさう云ふ大切
なもんだから迂闊な者を登らせることは出来なから待ちな
さい、串に付つたら俺がお前方の見る前で取つて来やらう 甲
ソレは御苦勞でございませぬ、さうして下さいませぬ、大きに有難

遊 西 記

う存んじまを 悟空少し待つてなさい、無間に登るつたつては
さうは登れぬから能く見嚮を付けて登るから……と旨ひを
がら悟空毛を一本出して呪文を唱へて其處へ立たせると自分
の姿になつた、自分の姿を指らへて其所へ立たして置いて、悟空
は忽ち木の間に小さな蜂になつてブーンと木の上に登つた、女
官は様子を見て居ると悟空が立つて居るものとさういふ所か
ら何んとか話しををるだらうと思つて見て居る中に奴め蜂に
なつて桃の木へ登つて 悟空ヤアあるく、待つてく、コイツを
俺が食つちまはう、桃を食うのは上手でございませぬから腰を懸
けて居て女官に見えないやうにをるのが管人の術だ、ソレから
其の九千の桃をバクバク食やアがつた 悟空美味
なせうも九千年も此の枝に付いてるんだからスツカリ味が付
いて居る、是れは美味や、又向ふの木へ飛んで行つて皆な食ひ盡

遊 西 記

して仕舞つた 悟空モウ宜い、何故何だつて腹が満くなつ
ちやつた、再び此の虺になつて降りて来た、遙か向ふに見て居る
女官は悟空が立つたさうでございませぬから、何うしたんだらう
早やく登つて呉れ、ば宜いと思つて居る中に、野郎飛ひ来たつ
て忽ち木の間に元の姿になり悟空の姿を消して一本の毛は
其の儘身の中に納めて 悟空何だよ、何う見ても其の桃は無え
よ 甲無いことはございませぬ、遠くから見てもさへありました
ので 悟空無えもの仕方がない、是ぢやアなからう、行つて聞い
て来るが宜い、女官も登りて側へ近付いて見ると道は抑如何
に今まであつた九千歳を保つて居りました、桃は一ツも見え
ないからビックリ、登りて 甲是れは大變、散つたら其邊りへ
落ちて居なければならぬ、何うしたとだ、と右の次官を訴れた
へると云ふので行つて仕舞つた、悟空は跡へ觀つて 悟空馬鹿

西遊記

だ、俺が食つちまつたんだから何處へ行つたつてあるものか
 だが待てよ、斯うなつて見ると俺はモウ居るのは思だ、面白くも
 ない、人を輕蔑しやがつて大勢の客を招びながら俺を其の席へ
 招んで呉れないのだから俺に降らア水簾洞へ歸れば俺の家だ
 何んなことかあつたつて大王だから、此方へ来て俺かの月給
 を貰らつてるから此様に腹を立つやうなことがある、就いては
 立つ鳥跡を濁しなど云ふが俺はさう往かねへ、立つ鳥跡を濁
 して行け、モウ大抵客人も来たらう、寶閣瑤池には設けの席があ
 ると云ふから何んな飾り付けがしてあるか一番見てやらう
 と悟空忽ちまの間に御呪を唱へて一の雲を呼んで其のうゑ
 へ乗るかと思ふと遙かに寶閣瑤池に至りました、寶閣瑤池と云
 ふのは是れは園を離れまこと彼れ是れ一里餘りにして七階
 の高樓でございまして、どうも其飾り付けの美麗なること態だ

西遊記

しい其宮で王母諸佛を招かれて觀應致しまと諸佛神の坐
 まり來りまゐるのでございまして、十分に飾り付けがしてある様
 子、けれどもまだ神佛が其所に來合せて居ない、悟空「ヤア、
 悟空忽ちまの間に雲より致して其所へ降り、身体駒虫となつて
 飾り付けのしてある處へ來ると何うも食物は山の如くに積んで
 あり、又靈の中には醃酒が悉くありまほ様子、けれども之を靈
 をして居る者は二十人も居る、忽ちまの問眼虫となつて名々の
 殿の穴を二三廻歩いた、スルト名々眠りに感じたものと見えて
 二十人とも引繰返つて寢て仕舞つた、悟空其間に靈を取出して
 靈を拂つたが酌んで飲むのは面倒だと靈からカブ、
 がつた手當り次第有合はした結構な物をバク、
 つて仇をして行かうと云ふ積りだから、ソレは喰掛けぢやア打
 撃つて仕舞つたり酒を飲み掛けてソイツを殺り出して靈が割

西

遊

記

れるからが其邊りへ流れる番の者は皆な寝て居るんだから
 平氣なもので……だが何故何んだつてさうは飲めない、十分に
 やつた 悟空、サア何でも持つて来い、筈棒めへ誰だと思つてや
 がるんだ、天大連孫悟空ッてんだ馬鹿にしやがつて、此様な所
 に誰が居るもんか、後足で砂だ、此處ん所へ小便を引掛けてやれ
 悪戯な奴で、安閑瑤池の結縛な敷物の上へチャア、垂れやが
 つた 悟空、ア、もう宜いや、此奴等は寐かしたつて置か
 う人が来ると面倒だ。と悟空其儘に再ビ雲へ乗つて詭異山水
 洞へ歸りまをる積りで頻りに走りして参りました所か幾ら悟
 空でも喰ひ酔つて居て、行く行かない、ア、面白いくと雲の
 上を飛んで歩いて居りま中に向うして踏外づしたが、ゴアラ
 くくと轉がり落ちた、半間な野郎さ 悟空、ア、痛え、飛んで
 もぬへ雲に懸間があつたんだ、人を落やアがつた此ん畜生……

西

遊

記

何だ、此處は大きな家だ、此處は……ヤア向ふに何だか大
 集まつてやがる、ハチな、ユイツは一ツ階りて様子を見てやらう
 と忽ち一の出になつてやつて来た見ると是は太上老君と云
 ふ人の住居で、此太上老君と云ふのは玉帝に血縁のある人で
 さへまそ、大勢の弟子を集めて學問の教授を致して居る、悟空之
 を見たが、ヤア是は評判の太上老君の屋敷だ、彼處が學問所だ、あ
 の向ふに居る巖の長い老翁が太上老君と云ふ奴だ、入勢居る
 のは弟子だ……、然う、宜いことを思ひ出した、此太上老君と
 云ふ奴は天下に一品と云ふ位、不老不死の良藥金丹と云ふも
 のを貯へて居る、ソレは常に櫃の中にある葫蘆の中へ入れて中
 く人に見せぬへ、其金丹を一粒飲むと千歳、二粒飲むと二千歳、五
 粒あつて太上老君の是が數だ、今を去ること百年前に玉帝に一
 粒を獻じて其時に帝尊とく喜悅在まして此住居万端を下し位

かれたと云ふやうなことは聞いて居る、まだぬどに五粒あるに
 相違ない、何うせ斯うまつたんだ、飲んで行け、何うあるもの
 か、けれども學問をして居る所へ行つて一番見て来てやらう
 ソレから其櫃の中にあると云ふのだが、何處だか知らん、一つ老
 掃に金丹が何處に道入つて居ると云ふのを聞いてやらう、悟
 空、忽ちちの間に胸出にあつて學問所へやつて来た、太上老君正
 面に扣ゑて名々に頻りに其道を教へて居る御弟子達は一同ソ
 レを聞いて居る、スルと一人三十恰好の男、一段濟んだ機會に中
 座しました、小僧にでも行くのか、高樓より下へ降りて行く所を
 胸出にあつて見て居た悟空、突然其所へ降りて来て其男の咽喉
 の所を押へた、胸出位がと思つて居る中に、ウーンとめめたから
 奴はソレツきりだ、死骸を其所へ隠して置いて、其奴の姿に豎じ
 て再び老君の側へ坐つて居る、此中に後席をせらるゝものと見

るて弟子達は何れも謹黙して老君の講義を聞いて居ると、悟空
 は坐つてゐるんだが、あの野郎何と云ふ野郎だか名を聞くのを忘
 れて仕舞つた、長く此處に居るとコイツは化の皮が現はれるぞ
 悟空、エ、先生……先生、老君は之を聞いて、老君「コレ、講義
 中に左様なことを言ふものでない、貴公も數年の間當所に居
 て其事を辨まへて居らば、何うしたものだ、講義中に口出し
 をしちやア往かん、淡海、悟空、心中に占めた俺は淡海だ、悟空
 先生へ少々伺がいます、老君、口を利いちやア往かんよ、悟空
 往け、おくつても何でも聞かなくつちやアあらぬ、先生
 只今御講義は御講義として先生の不老不死の良薬金丹と云ふ
 のは全体何處へ道入つてまゐる、老君、何を淡海怪しからんこ
 とを聞くのだ、何にか今講義したる其中で解し難いこと、此處
 は何うぢやと云ふて尋ねるからまだしものこと、寶品と稱へる

西遊記

位ぬの金丹は何處にあるとは何んだ其方は金丹の所在を知らんことはあからう其方の常に預かる所ではないか 悟空「オヤ、ございませから……」 老君「自分の預かる物を忘れると云ふのは何うも不注意な男だ、貴様は……」 悟空「へエ、老君へエでは、何處へ仕舞つて置いた 悟空「お前いさんに聞いてるんで、老君「毎日の通り三階の南の隅大いある櫃の中に葫蘆がある、矢張りの中へ道入つて居る筈だが、外へ仕舞ひ換へはいたとまい、悟空「左様でございませ、分りましたので、ソレで宜しうございませ。名々之を聞いて 甲「何うしたんだいお前先生の御講釋中に妨害をしては往かん 悟空「何を言てやがるんだ 甲「オヤ……」 妻は生徒のやうにあつて居るけれども何うも臭いの臭くさいのつて奴が嗅つてるから……」 甲「何時飲んで來んだい 悟空」

西遊記

何時飲んだつて宜いや、ソウ 甲「臭いよ、さう吹いちやア。其中にフーッど亡くなつて仕舞つた、名々驚かして居る、悟空は其所に在さへ聞けば別段に用事は無いと云ふので、ソレから先生の言はれた通り三階の南の隅櫃の様子を見るとある中々錠前嚴重なにつて居るか其様なものを開けるのは何でもない悟空「忽ちち其櫃を開け中に這入つて居た葫蘆を出して見ると中に金丹か五粒あつた 悟空「エ、一遍に飲んで仕舞へ。此野郎餘程命を大事にするもの見えて五粒一遍に飲んで仕舞つた 悟空「フー、ア、好い心持ちだ、モウ是で宜いや……」 待てよ色々あるものがある、イヤ大層色々な寶を持つて居やアが、ア掛はねへ行掛の歌賀に持つてけ。此男は少し癖益もする、忽ち高樓を出でた、と、どうも平常能く規則を守つて居る人物が今日に限つて金丹

西遊記

の所在を聞いたり、講義中に口を出したりするものは怪しむ、若し
さうでも無い魔人が彼れに代つて聞いたんぢやないかと云ふ
騒ぎ、見ると其本体は氣絶して居る様子でございませうから一同
大いに遊ろいて介抱をせよと云ふ、下へと云ふ、此處に悟空様子を見
て、悟空大騒々々、もう露眼か、愚圖々々しては居られねへ。と忽
ちちの間だ雲を起したることにして、其の雲へ乗ると、悟空
ハヨイメめた。雲の上で踊つてやがる其の儘にして自分
於いては前申し上げましたる嶺、山、水、簾、洞へ立歸つて来た、又
ルと大勢居りました小猿は、〇ア、頭が歸へつて来た、又た失
策つたのでとかい、悟空失策つたんぢやねへ、俺れは辭職をし
たんだ、生意氣を言つてる、悟空斯う、斯う云ふ譯けで来た
んだから、天兵を降せに遊ひさい、軍さが始まるから用意をして
置け、今度来やアがつたら誰れでも掃まはさい、来やアがつた大

西遊記

將を殺して仕舞た。空細心得て多くの山嶽は用意をして居ると
大上老君が右の次第を玉帝へ對して奏聞をして得難い金丹を
盗み食つたのは孫悟空に違ふまい、又大切ある九千年を経たる
歳を食ひ剩さへ天上を騒がせたるは、即ち孫悟空と定まつたる
ことゆゑ愈々玉帝御怒り甚だしく之を怒せにして置くべから
せと俄かに諸方へ對して其沙汰をして天兵を降すことにあり
此度の先陣に於ては九曜星を大將として水簾洞へ降しませ
其兵は彼れ三十万に餘りまする位、天兵鼓を打つたること
て水簾洞へ人数を進めんと致せる悟空豫て待受けたること
ございませうから茲に陣立をして天兵を對手に再び合戦を
まゐる一條

第七席

此度の總大將は玉帝の甥に當りませう、願聖殿君、此處方は神並

力を得て居りまゝなる御人で、續いて四大天王何れも、鎧を着用し、十分に支度をして、愈々悟空を討たんと爲して、茲に數日の間をいたしました所が、悟空飛行自在にして、天兵を悉く、慍をいたしまし先陣の大將九曜星に於ても、其軍を敗られ、遂に賊をいたしまするの、有様どうも、其合戦容易あらざることでございませぬ。御師だけは、大略をして申上げませぬ。悟空は、數多の小猿を以て之を防ぎ、又何れよりか、雇ひ來りませぬ。諸々の化物を先陣に使ひ、悟空の通力を以ていたしませること、實に之が爲めに、大いに苦戰いたしました。顯聖真君に於ても、後陣に在つて、此様子を見て居たが、最早後陣に留まるべきであらうから、御自身に兵を進め、悟空と尋常の戦闘を爲さん、の心成にて、出軍をいたされ、ました。然るところ、此戦、南海の觀世音菩薩、是は桃園の不老會に招かれ、ました。から、南海より、いたして、惠岸行者を

人供に連れて會へ出るんだから、帽子を被り、洋服だか何だか、分らないが大變、美談込んで、出掛けて來た。惠岸と云ふ男は、家令だ上天にいたり、即ち其婿桃會に、臨んで、様子を見、右の次第、觀世音大いに御驚ろき遊ばして、殊に玉帝に於ては、其だし、御怒り觀世音に於ては、觀世音先づ暫らく御怒りを、静め給へ。吾れ、悟空と云ふ者は、如何ある事を爲せるものか、様子を見届けて、參らうから。尤も、御自身に行くのでは、ない直ぐに、惠岸行者へ對して、申付けられ、觀世音、汝參りて、水簾洞に居る悟空と云ふ者、何う云ふ、儂らきを爲すか、如何ある者であるか、其方が、向つて及ばざる様、おあらば、中々容易あらんことである、早速見て、參るやうに。惠岸行者、心得て、是亦た雲に、打乗りました。と、此處に扣えて居る、此奴こそ、悟空に相違ない、と心得たから、惠岸

其所へ現はれ出でまして馬鐵の棒を提げたることにて 惠屋
 如何に悟空汝天上を騒がせるのみから走數多の脚々へ對して
 不徹を倒らいたる者只今南海觀世音菩薩の命令に依つて惠屋
 行者を誘りたりサア尋常に降参いたるか降参せざるに於ては
 ある鐵棒の下に汝の首を打落さん。悟空之れを聞いてカラ
 と笑つて 悟空此我坊主奴賣様なとが来たつて驚ろくやうな
 ものぢやアないサア来い。と悟空思まぢの間に耳の中ちに入れ
 置いたる如意棒を取り出だし呪文を唱へると其の丈三間ばか
 りの鐵棒になつたブツーンと風を切つて打ち込んで来る
 様子惠岸は棒の名人で御座いまそから響らくのわいだ打ち合
 つて居る其の中ちには惠岸の持つて居た鐵棒を打ち折つた惠岸
 行者大はいに驚ろいて逆ても此の鐵棒を折るやうなものでは
 叶なはないと雲に乗つてドンと逃げて仕舞つた悟空逐ひ掛

けることは易いと雖もまだ圓聖眞君の夢近付いて回りまを
 から其磁き者を逐掛けて居る中に此華果山水藤洞を取られて
 はならんから惠岸を逐掛けあい陣中へ歸りました惠岸は思
 を切つて觀世音の側へ罷越して 惠岸何うも大變を假で云々
 斯様斯う云ふ譯でございませと委細を語るから南海の觀
 世音之を聞いて 觀世音如何にも怖い奴だ愈々捕置けな。此様
 子を聞いたから玉帝様も御怒りを増しまさる位悟空に於ては
 是までと心得たるから是れより神通を現はし呉れんと云ふ心
 底にて早や既に道半途参りました所へ圓聖眞君神通を現はし
 給ひたることにして此所へ逐を近寄せ 眞君如何に悟空此場
 に至つて恐れ入つて降参致しかば一命は助る左なきに於ては
 汝の首を此所に打落そが宜かどあつたる時に悟空愈々怒りて
 悟空汝如き者の爲に降参を致そ奔天大聖孫悟空にあら走イヤ

尋常の勝負をせん。とあつて彼の如意棒を出したることにして
 眞君へ對して打つて掛る眞君心得て之を受流し暫らくの
 間打合はして居る其間に眞君固より神通力の有つしやる仙人
 でございませから次第々々に姿を變せる悟空に於ても得意と
 せる所でございませから是も七十二般の變化の術を現はして
 戦つたけれども邪は正に敵せ悟空は固より邪法同様なるこ
 とを習つて居る眞君眞君に於ては神通力でございませから長
 く戦つては悟空勝はない、其術に破られませるものと見えて悟
 空忽ち叫ばぬことを知りましたから筋斗雲に降つて逃げる
 眞君再び之を逐掛け来りました其中に悟空の姿が見えなくさ
 つた悟空漸うに瀧江口と云ふ所まで逃げて来てホツと息を吐
 いた悟空もう馬鹿に強い奴だ、俺は大抵逃げたことはいが
 眞君眞君と云ふ奴には逆も叶はない上には上のあるもので、併

し、一瞬つて此處まで逃げて来ればモウ大丈夫だ、咽喉が乾い
 たから、これ一行つて一つ水を飲んでやらう、ア、波勢たど
 水を飲んで居る前、の所へ眞君ヌツク、と現はれたることにし
 て、眞君如何に悟空、悟空、オヤ、又来たか、ヤ、来られ
 たら仕方がある、と一口水を飲んで、だるばかりで再び彼の如意棒
 を取つて打つて掛りませる眞君に於ては槍を捻つて此所に向
 ひ、暫らくの間と云ふものは打合ふて居る、今度は一騎打だ、茲に
 御話、は別れまして玉帝を始め一同の方々に於ても下界の様子
 腹圓の有様は如何あらんと思召したることゆゑ南天門の樓上
 へ山御在まして下界の様子を見て居る、玉帝の御側には南海の
 觀世音、太上老君を始めとして諸佛御手許に和えて居る見ると
 今打合つて居る様子でございませ、打てば閉き開けば突入ると
 云ふは此事であらうか、悟空に於ても一生懸命の打合、眞君槍を

捻つて之に向はれました所の様子と云ふものは實にどうも火
 花を散らさど云ふ有様でございませす悟空に於ては中々勞れる
 様子がない、太上老君之を見給ひたることにして惜き所彼の悟
 空と云ふ者、イマ其説あらばどあつて忽ちの間に袋の中より
 して一の光輝を放ちまゐる珠玉を取出した南海の觀世音之を
 見給ふと觀世音老君愈々其珠玉を投げ給ふか老君如何に
 も眞君の御身に過ちある時は大事あり吾れ此珠玉を投て悟空
 を討たんとあつて太上老君忽ちの間に彼の珠玉を取て南天
 門の高樓より打合つて居る所を目掛けてブーンと投げたるか
 珠玉は假また老悟空の頭へ當つた如何ある珠玉であつたるか
 此珠玉が當つたかと思ふと悟空其儘に其所へ眞向に倒れたも
 う起ることも出来まいけれども悟空忽ちの間に如意棒を取
 つて耳の中に押し込めて仕舞つた逆も往けまいと知つて如意棒

を持つて行かれては大變だから耳の中に入れて仕舞つた、走ら
 んどしたのが身体縮んで走ることが出来まい、兎角する中に四大
 天王其所へ駆來つたることございまして金の繩を取出して
 忽ちちの間に悟空を打縛つた、眞君此時に至りまして茲に呪文
 を唱へて、彼れ變化の出来ざる様も其繩を脱けて逃げることに
 が出来まいやうに之を押しまゐる法のありませもの見え
 悟空縛られて口惜がつた悟空誰だ俺の頭へ石を打付けやが
 つたのは酷いことをしやアがる、又どうも此石の打付かつた様
 子が只事ぢやアねへ、身体が腫れあかちやつた、妙なもの
 持つてやがる……あの太上老君と云ふ老翁が打付けやがつた
 んだな、見やがれ今に何うするか……朝られてまだ威張つて
 玉帝に於ても悪どく御怒こび遊ばして、扱ソレより直ぐに天上
 へ彼を引くと云ふことになりました、此上一同の者が會臨致し

たることにして、扱悟空は何うしたものであらう、死刑は勿論だ
 けれども死刑にも依る、何う云ふことにしたら宜からう、所が
 々斬罪と云ふことに極つて、大刀鬼王へ對して仰付られまし
 たることにして、刑罰へ引出して孫悟空の首を刎ねる、官位
 は勿論のこと、首を刎ねる場合に至りましても悟空平氣なも
 のだ、悟空サア斬るから斬つて呉れ、人間一度は死ぬんだ二度
 とは死さねへのた、俺は金丹を飲んだり、桃を食つたり色々や
 たんだけれども矢張りサア御断り。大刀鬼王に
 於ては巾着の刀を振上げ、大勢の役人周囲を取巻いて居る
 鬼王、悟空、悟空、何だい、鬼王、何か言残すことはあいか、悟空
 今にまつて言残したつて仕方がない、此様かことを言はねへで
 早く斬んねへ、お前達は首斬人だ俺は別に悪いことをしたん
 ぢやあし、唯天上を騒がして桃を食つたんだ、ソレだけのことで

面白くもねへ、首を斬るあんて、馬鹿にして居やかる、斬れるから
 断て見ろ、俺の首は斬れる首ぢやアねへ、鬼王、斬あい首かある
 ものか、悟空、だから斬つて見ろッてんだ、嗚呼をして居る、大刀
 鬼王に於ては、思ちの間に刀を振上げたることにして、悟空の首
 を一ツヒロイとやつた、首の所へ當るとカチン、オヤ此首は緩だ
 ぜ、又刀を下し、まどとガチン、と音がする、押断にしてと心得
 たるから名刀を持つて首筋の所へ掛けて押したけれども平氣
 だ、悟空、くもつてへあ、オイ何うするんだい、早く斬らねへの
 か、此奴の首は逆も斬れあ、仕方か、あ、再び半内へ下して
 聞いて又突聞をそると評定を再び致して、何として、其首か、金
 の如くにして斬れあ、金も中々尋常の命でない、餘程堅い金の
 やうだ、何分にも首が斬れないと云ふことにあつた、首が斬れな
 いと見れば仕方か、あ、いから、煮殺すと云ふことになり、再び刑罰

西遊記

へ對して大釜を搦えた、けれども斯う云ふ奴だから一日や二日位、養たからつて死ぬ氣遣ひがない、三十三日晝夜之を養ると云ふことになつた、到頭釜の中へ悟空を入れて逃去らんやうに蓋も破重に致し、重みも深山付けて置めて、是から四五十人の者周圍を取り巻いた晝夜の別ちなくドン／＼焚した、釜の中には水も何も道入つてゐるのではございませぬ、謂はゞ悟空の黒煙を拵らへるので、此奴の黒煙は血の薬だと申しまゝ、悟空中へ道入つて居たが、燒くのでございませぬから金の繩は先へ燒切れて仕舞ふけれども、常人は平氣だ、悟空ハ、ハ、ハ、此腹にして居やからア、籠絡め、其謀ふことで死ぬんぢやねへ、ア、温けへや、良い心持ちだ、當分底て居やうと氣樂を奴で釜の中で寝て居る、ガツ／＼とも音かしまり、三十三日晝夜ドン／＼／＼焚した、もう大抵粉にあつたに相違ない、ソレ／＼と云ふので釜に掛

西遊記

官大勢の者が付いて釜の蓋を開けると、フウ／＼と黒煙か立ちまゝから、ソレ悟空の黒煙か出来たと見ると、其釜からゴツ／＼と現はれて、悟空ヤイ、役人オヤイ……。釜から出ると突然掛官の襟首を捕へたることにして、オインと一人を其所引倒して、悟空能くも汝等今まで觀して居たを覺悟をしろと云ふと如意棒を取出したか、如意棒忽ちの間に一の劍にあつてソレを振始め、た愈々此度は悟空怒つて來るのでありまゝから之に向ひまゝを者忽ち數十人と云ふ者、此所へ落命を致した様子一同の者之を見て、ソレ悟空がまた死か、い焼殺せ炊殺せと皆つたが、中々手も付けれぬ、其中に悟空は暴に暴たることに、俄かに風を起した其、暴風と云ふものは一通りでない、焚上かる、焔に於ては、ア、ア、アと燒野の方へ對して焚移りまゝを所の様子でございませぬ、悟空其焔の劍に立上かつたことにして

西遊記

第八席

悟空ゴウクウア来キい一旦いちだんは吾われれ御ごされると雖いも最も早はや此こゝ場ばに至いたつて
 縛ばされるを罷ばるなし此こゝ上うからは玉ぎよ帝ていの命いのちを取とるをあつて悟ご空くう既すで
 に天あま上うへ躍なり上あらんとする有あ様やうでございまと所ところへフウふうツと
 西せいの方かたより一いつつの風かぜ清きよらかに吹ふき来きりますると悟ご空くうの前まへの所
 へムツクり立た上あがりましたる一いつの御ご方かた四よ五ご名なの羅ら漢まんを連つれた
 ることにして大だい聲せいを揚あげ給たまふて 如来にがひ如何いかに猿さる師しまれぬ猿さる...
 悟ご空くう之のを聞きいて大だいきに怒おこつて 悟ご空くう吾われは齊せい天てん大だい聖せいの大だい官くわんに進しん
 んだる孫そん悟ご空くうなり猿さるとは何なに事ことか汝なんぢ何なに者ものあり 如来にがひ吾われをしらせ
 や西せい方かた極ごく樂らく世せ界かい釋しやく迦か如にがひ来きなり 悟ご空くうナニ釋しやく迦かだん松しょうの釋しやく迦か
 来きたつて驚おどろくのちやねへ悟ご空くう此こゝ時ときに至つて怒おこりの儘ままに釋しやく迦か
 如来にがひ来きへ對たいして打うつて掛からんどとる時ときに釋しやく迦か此こゝ場ばに至つ
 て悟ご空くうを脱だついて茲こゝに戒かいめませる一いつ條じょう

西遊記

悟ご空くうは唯ただ猿さると言いはれたるが如何いかにも心こゝろ外がわ齊せい天てん大だい聖せいの官くわんのある
 者ものを何なにで猿さるといつたるか釋しやく迦か半はん尼に如にがひ来きなりと雖いも何なにしに許ゆる
 さうか覺おぼ悟ごをしると如にがひ意い林りんを取とつて向むかはうとる四よ五ご名な御ご供ぐ
 をなしたる羅ら漢まん大だいいに怒おこつて之のを制せいさうとる釋しやく迦か如にがひ来きはニ
 ツコり御ご笑わらひなさると 釋しやく迦か汝なんぢ等ら一いつ同どう助すけくことなかれどうも
 此こゝ猿さるは惡あく戯ぎをして往いかん天てん上うを登がせ其その上うから玉ぎよ帝ていの惱なごみ
 をいたはまは此こゝ猿さるの惡あく戯ぎから起おこることである其その方かた如何いかなる術じゆつを
 用もちひるといへども笑わらふに絶たえたる猿さるの人ひと眞ま似に... 悟ご空くう人ひと眞ま
 似にだ 釋しやく迦か汝なんぢ何なにの位ゐの術じゆつかあるか汝なんぢの術じゆつの有ありなけを其その所ところに
 於おて見みせよ語かたれ悟ご空くう大だいいに怒おこつて 悟ご空くうされば吾われは七しち二に般ぱん
 の總そう化げの術じゆつあり又また雲うん中ちゆうを飛と行ぎやうするは即すなはち平へい地ちを歩あるかどとく
 筋すぢ斗と雲うんの雲うんへ乗のるときは一いつ時ときに十じゆ万まん八はち千せん里りを飛と行ぎやうする妙めう術じゆつを
 心得こゝろえて居ゐるのだ 釋しやく迦か汝なんぢ其その筋すぢ斗と雲うんに乗つて十じゆ万まん八はち千せん里りを一いつ時とき

西遊記

に飛行せると云ふなれども余の手の中を三日にして歩き得る
か何うだ 悟空ナニ釋尊手を廣げ給ふて 釋迦此手の中を三
日にして汝飛行せよか吾れ佛力を以て此の手を大いに廣げる
汝此手の中を三日にして歩く術があれば其方へ降参をする
悟空驚愕め其手の中を三日に歩けぬ一奴があるものか 釋迦
必ら老三日にしへ歩くか 悟空三日は愚か一日も半日も掛ら
ぬへ 釋迦然らば其方の變化の術を試みるには幸いなり余の
手の中を歩けと仰せられながら釋尊中指の先へ印を遊ばして
釋迦サア其方三日にして此の中指の先まで往つて來られるか
悟空ナニを直ぐ行つて來る 釋迦直ぐに行けるなら行け然ら
ば確と約束をしたぞ 悟空ウム、した。釋尊忽ち其の手を返へ
したまふと俄かに白雲の棚引いたることにして廣漠たる原に
相い成り颯々たる風の吹きたる様子悟空之れを見て 悟空

西遊記

中々やる事其處からば……と云ふと忽ちの間に呪文を唱へ
筋斗雲を招いたることにして其筋斗雲に乗つてフウツと走
り始めた、一時に十萬八千里を走ると云ふ位のもので、ドン
ドン／＼と急いで行つたがさうも印をした所まで中々行かぬ
悟空さうも遅ろしい大さき手だ。是には悟空も呆れた、一日も
経ち二日も走り三日走つた所が何分にも印の所まで行かぬ
から 悟空是は通り過ぎたんだ。筋斗雲に乗つて此位走つて
指の先へ行けぬへことばねへ是は通り過ぎたに違ふねへ無駄
お道を歩いて居たつて仕方かねへ。見ると向ふに大きな柱か五
本立つて居るから 悟空サア何だいあれは何處まで行つたど
云ふ証據かなくツちヤアあらねへあの柱へ印をして行かう釋
迦半尼如來と云ふ奴は中々剛い奴だと云ふから略行つて來ま
したと云つても嘘だと云ふかも知れぬ、何處の柱へ斯う云ふ

ものを書いて来た云へば行つた証にあらぬ……大きな柱だ
あ。彼の柱の根元の所へ寄附つて毛を一本出して之を筆とした
又一本の毛を出して呪文を唱へて視どした。重宝を野郎さ、其柱
へ持つてつて、齋天大聖到此一遊を乞ひた。悟空、是で宜しく
是が有りさへすれば証據があるから平氣だ、歸らう。ソレか
ら又筋斗雲に乗つて歸つて来た。釋迦牟尼如来待つて御在遊は
す。其前の所へ来て雲を降つた。悟空、何處まで行つたか印のあ
来た。釋迦、何處まで行つた。悟空、何處まで行つた。印のあ
る所を通り越して仕舞つた。何百万里行つたか知れぬ、印をし
て来た。釋迦、何處に欺りを申す吾か手の中をまだ歩き切れん
悟空、印をして来よ。釋迦、何處へ印をした。悟空、大きな柱が五
本あつたから其五本の角の柱の所へチャーンと齊天大聖到此
一遊を乞ひて来た。釋迦、御笑いなされて。釋迦、之れか。と手を

廣げて見せるから悟空見ると釋迦如来の小指の端の所に書い
てある、釋迦、コレ、汝吾が手の中を飛行することさへ出来
ざるやうな山猿の身を以て天上を廻がせると云ふは怪からん
奴だ、汝數百万里を飛行したと思へども吾が手の中だ、其方の書
た筆は此通り小指の端に留まつて居るではないか。悟空、あれ
か小指だ、恐ろしい大きな手だな。釋迦、斯の通り吾に及ばざ
る上からは汝に示すことあるなり。悟空は釋迦如来に叶はんと
思つたから其儘にして逃んどしたる時に、釋尊笑いなながら御手
を返し給ふてペマリツと其下へ伏せて、如来御手を返して五指
を五行山となし大石の下に悟空をヒタリツと押へた。悟空、驚ろ
いて悟空、ア、重てエ。釋迦、汝動くな、如何に動くと雖も
も五百年を経れ。此所を出る者なし、今より五百年を経るに於
ては茲に名僧西方へ對して法論經を取り得るの貴僧あり其僧

此所へ来てつて助けんとすれば必き其方助かる其人に就いて
勤を勵め、ソレまでの間は何かありと雖も出ることを能き悟空
ッーム。悟空幾らもがくと雖も其大石の爲に押へられて
身も動くこと能はせ、隨て釋尊筆を執り給ふて近傍の石に墮
居、迷半と金書し給ふ此れを曾いたるは此下に人か居ると云
ふ印したさうで、尙ほ山神を其所へ招いで釋迦齊天大聖孫悟
空一度天上を騒かせたる罪あり、又諸神佛へ對し悉くの不
を爲したる罪あり、依つて此の所へ入れ置いた、殺そは不便
るから命は助け、汝折節此所へ見廻つて悟空に能く食を與へ
るやうに教せ、食する物は鐵の丸かせ、又銅の汁を飲ましてやれ
悟空妙なものを食う、鐵を食つて銅の汁を飲ふ、之を即ち山の神
土地の神へ對して釋迦如來より印はせ付けられたることにし
て御自分ば西方へ歸られまよ、山神地神は悟空に物を與へる、

悟空は彼々に術を施こさんとせると雖も釋迦如來の爲めに
彼の大石に包まれましたるので如何とも動くこと能はせ此の
と、こゝろに既に五百年の年を経ることになりました、御話し別れ
て茲に佞賢西天竺へ教文を取り得るがために參る、幸ひにして
悟空を助くるの一條より道々に佞賢の成立ちの御話に相成り
まよ、
第九席
既に悟空五行山の太石の下に押へられて居ること五百年、茲に
釋迦牟尼如來は西天竺雷音寺に在つて法輪教の三藏を再膺部
州に傳へんと南海の觀世音を招かれました、何事と心得て曾隨
如來の御側に來りました、釋迦如何に菩薩能く不から唯今よ
り東方に向いて飛行を致して貰ひたい、其用件と云ふのは法輪
の三藏を得んとする者必ら此西方に來るべし、ソレを尋ね

西遊記

て案内をそべし。御園の製九瓊の鏡三ツの緊管兒を授け給ひ。釋迦其方唯今より東方に進むべし、必ら此教を求めんと。もる者に逢ふたる時は其儘にして此西天竺へ案内を致そべし。どのこと、南海の觀世音菩薩三拜して觀世音如來の仰せ授こまり奉まつり申す。即座に御前を致して惠岸行者を御供に迎れて是より東方に趣むかされる行者御供を遂げたることにして觀世音菩薩雲に打乗り申す。東方へ飛行致しまさる、既に沙河と云ふ川に降り掛り申した、スルと浪を蹴立つてサツサツと云ふと、既にかために如何して之を渡らうかと思召して居る所へ波を蹴立つて來ることゆゑ扱はと鏡子を見ると色黒く眼圓くして大さく熊手を割さへたることにして、九つの傲首を履の邊りへ付け其處あること懸たしく例の熊手を上げたることにして觀世音

西遊記

へ對して打つて掛る様子惠岸大いに驚ろいて菩薩を片腕へ懸し。惠岸ヤア何故あつて觀世音を働らくぞ其者は如何なる變化あるか此所に御在に相成るのは南海の觀世音菩薩なるぞ吾は御供の惠岸行者なり無禮あらば其儘に御捨置かせ佛力を以て汝の身体を碎かんとして惠岸忽ちの間に持てる棒を取つて向ひ申した怪觀世音と聞くと後へ下り熊手を其所へ投出し、あることにして怪物エ、恐れ入り申した、右様の御方とは知らる此邊を往來する病僧と心得て既に打殺したはんと爲したるに吾か罪惡此上もあきことあり拙者は元と天上靈符殿の簾に捲くの役を暫らくの間暇めたる者、琥珀の盞を碎ぎ其罪に依つて八百鞭に打たれ、尙ほ下界に對して下されたり、然れども爲せざる無く暫らくは此流沙河を仕所と爲し往來の人を食つて今日の命を繋ぎ荒々しきことのみを致して居りたるもの今此處

西

遊

記

に通り掛りし僧二人、之を食はんとして此所に立出でたるもの
 南海の觀但昔嘗て云ふことを始めて承知致したり。願はくは
 此罪を許し、此上共に再び天上に仕へるやう御徳を以て吾を助
 け給へ。大慈大悲の功力を以て救ひ給へ。と手を合せて觀世音
 隨を伏拜んだ。菩薩は之を開給ふて惠岸を片臨へ退け。觀世音
 汝天上の人にして靈符殿の儀を捲くの役をあして居たる者が
 靈符を砕いて下界に下され、今日流沙川を住所となし人を食つて
 己れの命を助かるべしと云ふは甚だしいこと。其志しを翻へして
 再び天上に登り、帝の許に在るやうに致せ、併し余は今よりし
 て東方へ飛行をすの道、日あらせして此所に救を求に來る僧
 あり、其僧の弟子と相成つて其御方の御供を遂げ西天竺に至り
 如來の御前に出でて罪過如來を拜し奉まつらば自から其罪も
 滅すべし。再び元の官に就くこともあらん。唯今より其教を取べ

西

遊

記

き人、其僧の來るを待つて然るべし。怪物菩薩の御せ恐れ入り
 候へども吾れ今日まで僧を殺し食ふこと九人あり、其首皆あ斯
 の如く吾を恨んで身に付いて離れせ。何は此上共に僧の來る
 氣遣ひおし流沙河を渡らんとする時は妖怪あつて僧を食ふ
 と云ふの噂悉く高くければ僧の來るを待つと云ふこと思ひも
 依ら老願はくは菩薩の御供を許し給へ。觀世音「ハヤ」必ら
 せ待たれい、名僧此所に來るに相違ない、汝其志しあらば吾れ唯
 今其方に名を遣はさん。沙悟淨と云ふ名を與へる。變化大きに遊
 こんで怪物然らば其名僧の來るを持つて其御方に付き西天
 竺に廻りて如來を拜し奉まつること最とも樂しみとして
 待ちつらん。然らば……と云ふと此沙悟淨其盤にして再び流沙
 の河中へ還入つた様子、惠岸に於ては既に觀世音の御心利か
 ること其御徳の勝れたることに恐れ入りました。觀世音、惠岸

西遊記

何だい彼れは…… 惠岸酷い者が出ましたか、先づどうも此……
梅では色々出ますよ 観世音左様さ、出るであらう、出たればと
て別段に恐るゝに足らぬ。ソコで流沙の河を越したることにし
て道を怠いで御出になりませ、尤も目を重ねてのことござ
いませう、スルと山の麓へ通り掛りました、見ると福陵山と云ふ
山でございませ、其傍らを通らうとすると洞の中からブーッ
と俄かに大風が起つた、惠岸に御向いなされて 観世音、惠岸又
出るぞ 惠岸出ませう是は…… 観世音、風を起し位であるか
ら何か不思議の怪物が出るに相違ない。と俵有つて居ると、出で
たりやあ、其洞の中より身の丈勝れたることにて、是は豕の如く
是も熊手を携さへたることにして、忽ち観世音菩薩へ對し打
つて掛らうとせざるの機手に惠岸其間を逃ぎつたることにして
惠岸如何ある變化あるぞ、唯今此所を御通りに相成るは南海の

西遊記

観世音菩薩なることを知らざるか、佛國を蒙むつて後悔致そな
観世音は法衣の袖を組み給ふて物を首はせ彼の怪物の様子
を見るど彼の怪物は亦た其所へ熊手を投げ捨てたることにし
て 怪物へエー 恐れ入り奉まつると三拜九拜を爲して 怪物
斯る貴とき御方の御通りとも知らせ既に御兩人とも食らはん
とあしたるは手前の眼まじ、惠岸も驚ろいた、 惠岸、どうも食は
う、と思つて出て来た、全体貴様は何んだい 怪物、吾れは元
と天河の寧天選元帥を勤め居りしが酒の爲めに女官に戯れ
ソレが爲めに玉帝の怒りに觸れ、下界へ下だされ、常に人を食ふ
て飽きせ、悪業を爲すこと夥だしく、唯今に當たり斯る貴とき
佛の御通行ども知らせして、食らはんとして立山でたる段、恐れ
入り、唯今より本心に立歸り菩薩の御供を遂げ如何ある修業を
も致その心底願はくは御供に御連れ下だし置かれれば厭はけ

西遊記

あう存んじ奉まつると彼の者三邦九邦を致するから菩薩之を
 聞いて觀世音が供をして其の道の修業を致したいと己の
 れより心を改めためるは願どに何よりのこと併し今に西天竺へ
 教を求めに参る道徳の名僧あり其の人の弟子とあつて成佛得
 脱と云ふことを致せ必ら余の供をさせることは相成らんい
 ま暫らく此所に相侍て併し此上どもに人を食ふと云ふことは
 甚だ宜しくない其事は改心するやうに致せ怪物恐れ入り
 奉まつりまをる然らば其名僧の來るを此觀音山に相侍ちませ
 う觀世音左様致するやう今も途中に沙陞淨と云ふ者を一人
 改心させたり又汝輩に五つて改心なると云ふは何より吾喜こ
 ろ所ありとあつて此者の姓名を猪悟能と下し置れた大さに喜
 こんで其儘に驢鞍山の洞へ猪悟能は行く惠岸は之を見て居た
 か惠岸どうも御師匠様此遊海では何が出るか知れません何

西遊記

でございませと彼れは……觀世音左様な家を猪と指らへた
 子供の化物かな惠岸どうも妙なる面でございます耳か立つ
 て寝たな奴で無闇に食ひたがつてばかり居りませ共儘にして
 此所を過ぎるとハア一ツと云ふ風が起つた惠岸は又出ま
 そよ觀世音能く風が起る何事であるかと云ふ中にソ一ツく
 菩薩助け給へ南海の觀世音菩薩助け給へと云ふの聲中々に聞
 えたることゆゑ觀世音菩薩觀音になりませと上りもやら下
 りもやら中へ對して觀龍と云ふのは龍の中では一番下等の
 る龍には色々ありませと觀龍と云ふのは龍の中では一番下等の
 龍如何なるものなるぞと觀世音菩薩を發した其時に彼の觀龍
 龍を上げたることにして觀世音は西海龍王の子あり天上に在
 つて殿上の明珠を焼いたる罪に依つて斯の通り観龍と化し此
 中へ天に釣し上げられて長く苦しむ菩薩の徳を以て吾が命を助

西遊記

け又菩薩の徳を以て吾れ再び天上界に出るか菩薩に其の意を
任すべし唯中天に在つて吾れ苦しみたこと數十年なり助け給へ
とあつて聲を上げる觀世音聞き給ふて觀世音即有つて右様
に附せられたる者を吾れ如何して之を助ける殺すと云ふこと
は出来ん併し吾が佛力を以て今よりして汝を白馬と爲さしめ
ん而して待たれよ今に西天竺へ教を取らんとするの僧あり必
ら來るべし其僧を乗せて釋迦如来の御側へ参り其大罪を許
し買ふべしソレまでは汝を白馬と爲さしめ其時を待たれよと
言ひあがらに觀世音菩薩忽ちの間に右の二指を以て何やら
此所に文字を掛くの如きことを致すと彼の歌龍其体化した
ることにして一の白馬にありました喜こんで東の方へ對して
去りました様子暫らくの間見て居たる惠岸は愈々菩薩の徳
の宏大なるを思ひ此藍梅で見れば先づ其僧に違ふのも長いと

西遊記

ともあるまいと思ふてソレから又日を重ねて参りましたる所
惠岸嘆息した惠岸御師匠様へ御尋ね申しました何でございま
せう向ふに恐ろしい光り物を放ちまゐる山がございませ
世音あれが五行山である惠岸へエーあれが五行山 觀世音
あれに聊か用事あつて此所へ参つた 惠岸へエー 觀世音日
外天上を騒がせ蟠桃會を散々に荒ふ其どうも悪戯一通りあら
ざる齊天大聖孫悟空と云ふ者を如来自からあの五行山の巨石
に押へ置いた幸ひなり彼所へ参つて悟空に對面して参らう
コで五行山へ御出になりまして 觀世音地の神を呼べ。惠岸心
得て地の神を招きまを暫らくすると出て來た地の神つたつて
御尻の神ぢやアない所の神だ山の神でございませすやがて出て
参りまして 地神是は誰方かど心得たら南海の觀世音様でござ
さいませ何か御用でございませ何か 觀世音イヤ其方違に聞

西

遊

記

いたら知れやうが悟空はまた此儘に居るか。地神「エ、居り
 ますともどうも口は達者でございませぬが身体が動くことか出
 来ないのて釋迦如來の爲めに大石の下に押へられて居ります
 觀世音「フー、何を日喰して居る。地神「如來様の仰せに従ひ
 まして三日目く、に鐵丸を三ツづゝやりませぬ。觀世音「鐵を食
 る。地神「左様でございませぬ、ソレに銅の汁を吸はして居るの
 でございませぬ。觀世音「ソレで達者かな。地神「どうも達者なこ
 と夥だしいか。幾ら達者でもどうも仕方がございませぬ。何うに
 も押へられて居りませぬから通力を失なつて居ります。觀世音「
 悉つて對面をしたいのだ。地神「宜しうございませぬ。御寮内を
 致しますから見てやつて下さいませ。彼奴も惡戯者でございま
 したけれども何うにも仕方がございませぬ、オイ孫悟空、孫悟空
 悟空「何んだい何にが孫悟空だ俺か。動けねへと思つて馬鹿に

西

遊

記

しやかつて。地神「何を怒つてるんだ。御容様が来たよ。悟空「
 たつて仕方がね、誰か来たつて動くことが出来ねへぢやね。
 か。觀世音「悟空「々々。悟空「何でえ。觀世音「余を存じて居るか
 悟空「誰れ……。觀世音「余の面を知つて居るか。悟空「知らねへ
 誰だか……。ソレどこぢやアねへや、身体が重くつて仕方がねへ
 觀世音「動けんか。悟空「動けねへから斯うやつてるんだ。動けれ
 ば疾に逃げてつて仕舞う。觀世音「さう怒つたつて仕方がない
 能く面を上げて見る。悟空「暫らく見て居たが。悟空「ハテな見た
 やうな……。待ちねへよ、俺は物あんぞを忘れたことはねへのだ
 が、此處へ押へられてからまるで馬鹿にあつちやつたもんだか
 ら物忘れをして狂かねへ……。さうくお前さんは何だね、南天
 竺の觀的だね。觀世音「觀的とは何だ、如何にも南海の觀世音で
 ある。悟空「何處へ行くんだい、此様を所へ通り掛て……。觀世音「

西

遊

記

此方も暫らく悪戯をしたか 悟空、マア言いつこあしたよ、あの時は此方は少し強でネ、散々腹亂暴をしたんだ、けれどもモウ何だよ、御釈迦様には時はねへ、どうも御釋迦様の手の上を歩かうと思つたら歩くことが出来ねへで、到頭此處へ斯うやられちゃつたんで、何うか一つ心を改ためて是から正直にして成りたけ人を助けやうと、斯う思ふので、思つた所が仕方があかつたが觀音様が御出あそつたのは何より、お前さんどうか御託をしてお呉んさい、是から手前は佛門へ入つて佛學を修めて、爲にあることをして見たい、人を助けたいと思つて、今更で散々悪いことをした、悪いことをしたつて、欺偽をしたり強姦をしたり、其様あことをしたことはねへので、唯悪戯で撲つたり殺したりするのが好きだつたんだ、是から一つ心を改ためて正直にやらうと思ふのだが、ネー觀的 觀世音觀的々々云ふな 悟空、ち

西

遊

記

やアまア觀音様お前さんから能い強梅に西天竺の親分の所へ言つて貰いたいもんで、ネーオイ 觀世音、オイとは何んだ、もう少し待つてろ 悟空、待つてろツたつてお前さん、もう五百年も待つてゐるんで、疲勞して仕舞つたネ、 觀世音、今に此所へ教を得んとして參る僧かある、其名僧の弟子にあつて、釋尊の手許へ行つて御託を遂げ、釋迦如來を拜して再び天上に至り其職に就くやうになるであらう、から心を改ためて其僧の來るを必ら此所にて待ちなさい 悟空、ちやア何だね、西天竺へ教を賜りに行く坊さんがあると云ふんだネ、其奴を待つてゐるんでお前さんは是から何處へ行くんで 觀世音、私は其方に逢いたいのだ、釋迦如來の作せを聞いて出迎へあがら參つたのだ 悟空、厚でだから出してお呉んさい、觀世音、私には出せまい 悟空、弱つたね、どうも眩度、其坊さんが來て呉れ、は宜いが其坊さんが又臨

百三十六
 遊か何か通つて仕舞つちやア仕方があるが……どうか其效を
 取りに行き坊さんに選つたら是非五行山へ寄つて悟空を連れ
 て行けと言つてお呉んなさい、他處を行つちやア往けねえつて
 ネ、京町や伏見町を通りつこなしだよ、觀世音馬鹿野郎五行山
 に京町や伏見町があるか、悟空マア成たけ新道や裏を抜ねへ
 で……觀世音新道や裏があるものか、悟空宜こさいまじマ
 ア待てますかネ、何か一ツ地の神へさう言つてお呉なさい私やア
 口惜くつて堪らねへのだけれさも何分さうする事も出来ねへ
 もんだから馬鹿にしやがつて三日目くんに鐵丸を食せるんで
 せう、ソイツを日を間違えやがつて四日目位に持つて来やアが
 るんで昔から勘辨出来ねへで叩つ殺せんぞか何うもること
 出来ねへから仕方かねへが斯うあつてりやア食物の外に樂み
 はねへのですから何か食物や何かは此日に呉れるやうにさう

百三十七
 言つてお呉んなさい、地神申上げまじが其様ふことは決して
 あるので三日目にあらぬのに食つちまつた腹か空つて往き
 いから明日持つて来いと申しまじが釋迦如來の仰せだから三日
 目に鐵丸を三つと……悟空さう言はねへで三日目に三つづ
 づ呉るのを日に一つ呉つてんぢやアねへか、同じみつた其處を
 願むので……觀世音釋迦如來の仰せであるからソレは出来ま
 い、併しどうか山の神も力めて三日目には三つを持つて来るやう
 に……貴様も三つ食したらソレにして置け、悟空腹が空つて
 斯うあつてると食物の外に樂はねへもんだから、偶には天井の
 一つも食ひてへど……つたつて、さうも性ねへので、觀世音馬鹿
 を言へ悟空か天井を食奴があるか、悟空さうも振掛や汲込も
 食せねへで鐵丸と極つてるんで、アイツも一日や二日は宜いが
 餘り長くあると飽るネ、併しマア手前勝手ふことを言つて相濟

西遊記

ませんどうか何分一つ名僧の來る所を御願申しませ。觀世音
必ら此所に相待て。悟空必ら待てつたつて何處へも行く
ことが出來やアしねへよ斯やつて居ませから……此御供をし
て來たのは惠岸と云ふ男だ。日外お前さんと打合つたか。身丈
は大ききつて立派な杖を持つて向つたら尻放腿で仕方かね
へ此様お者を連れてたつて仕方ありません。惠岸さんだつて妙
な者を引張つて來た。觀世音貴様さう悪口しちやア往かん
惠岸之を聞いて驚ろいた。どうも酷い奴だと思つて居る。其儘に
して茲に觀世音菩薩は悟空を其所へ留置き、御自分に於ては紫
雲に御乗り遊ばして東方へ歸して飛行を致されませ。悟空はま
だ暫らく此五行山の太石の下に居りました。然るに幸ひにして
悟空を助けませる所の名僧。五行山へ來りませる一條に相成
りませ。

西遊記

第十席

時に貞觀の十三年春のこと、長安の都と云ふのは悉く
の所、勿論此處には唐の太宗皇帝居城でございまして、人民も
り、國も富み豊かに致して唯儒を以て今日の樂しみと致され
ばにや儒道の盛んなること懸たしく、太宗皇帝に於てもどうか
良き學者を聘して之を儒徳に學ばせたいと思召して在つしや
然る所茲に海州の人で陳學字を光蕊と云ふ者がございませ。此
人長安の都へ來つて、段々其學術を職はしめたる所、此人に越し
まする人はない。皇帝悉く喜悅在まして遂に之を儒徳と云ふ
ことに致しなした。儒徳と申しませると皇帝へ物を教える、けれ
ども貴所か物を教はると云ふことはいから、本なら本を讀め
朕が之を聞いてやるに云ふ之を儒徳と申して我國にも其徳が
ありませる。其中に追々此人の徳も現はれ、誠にどうも行狀の正

しい人でございませぬ、幸ひにして妻を娶りまして、
 人を妻と致した所が、是が實にどうも二人とございませぬ、
 女と云ふ者は美しくしいといふが爲に、何となく我意に慕ひま
 るもの、自分の美を鼻に掛けて夫を侮るなと云ふのが、
 さいませぬ、此温嬌に限つては誠に温順うございませぬ、夫光慈を大
 切に致して尙ほ、其評判も良く、勿論女教師も出来る位であ
 りませぬから、夫の方は大學校へ出て行き、妻君の方は女學校の方
 へ出て行くことと云ふことで、實に豊かに夫婦が暮して居りませぬ、其
 中にもう懐妊を致し五月六月と云ふことになりまして居るから、
 光慈の喜びは一通りであらう、何うか早く子供の顔を見たいも
 の、願はくは男子であれば此上もさき喜びであると思ふし、温
 嬌も何うかして夫の樂しみにして居るものだから、男の子を生
 みたいと思つて居る、天に風雨の降る、地に震動の妨げ、人に病氣

の憂いと申しまして、夫婦の身の上には何事も無いが、光慈の母
 が海州に居つて居りまして、此母を疾うより此都へ招ばうとし
 ても、田舎育ちで、そんなに都が良からと云つても、私には佳
 れた所だから、此方に居ると言つて何うしても来ない、其母が大
 病だと云ふ電報が掛つて来た、其時分から、彼地には電報があつ
 た、と見えて、無ければ無いで、御免を蒙る、何うも夫婦の者が、
 ろいた、光慈温嬌、私は母の病氣と云ふから、此事を届けて一先
 づ海州へ行つて様子を見たいと思ふ、お前は留守をして居て呉
 れるやうに……温嬌、良人怪しからんこととございませぬ、御母
 さんの御病氣貴所が一人で行しつて宜いと云ふものでござ
 いませぬ、私くしは、此方へ参つてもまだ、海州に居る、
 母さんに御目に懸つたことがございませぬから、幸いと云ふ
 ではありませぬが、何うか御病氣の御世話を致したいから、連れ

西

遊

記

て行つて下さいまし 光蔭ソレは尤も千萬だか恨だから
 温姫様とは申しながらまだ臨月には餘程用がございますか
 ら途中で万一のことがある氣遣いはございませぬまい何うか
 非さう云ふことにして下さいまし 光蔭さう言ふからば同道
 致もことにしやうならば止せば宜いには……と思つたのは何か
 此がぬらそと云ふことでもございませぬらうか温姫は強つて
 同道をしたいと云ふ夫婦の情あり夫へ對して親を立てる者は
 親に孝行をせよのが道理でございませぬ光蔭もさう云ふこと
 らばと云ふので家母なを連れねると面倒でございませぬから
 婦人なりさう云ふ學者で別段に身裁なを立派に飾つて行
 くど云ふのではない順と粗末な装束でございませぬ又温姫も面
 こそ美おれ姿は成るべく自立せぬやうに粗服を纏ひまし
 て流州に云ふ屋へ参りませぬ……道入つて様子を見ると、

西

遊

記

うも親類が大勢来て居る ○ヤア光蔭さん御歸んかそつたか
 御母さんも一しきり歸つたんで、マア能く歸つて来下さつた
 光蔭皆さんの御世話にあつて私も申候が無い斯う云ふことが
 あらうと思つて母を都に招かうとしても母が頑固で都へ来て
 呉れませぬから…… ○ソレよりはマア御母さんの御病氣を
 見舞つて下さいと云ふので來つて見るともう六十に及んで居
 りませぬ阿母様で居る様子 光蔭エ、母上暫らくでございま
 した此度の御書面を拜見して實に驚ろき入りましてございま
 せ、光蔭をございませぬ陳光蔭でございませぬ。悴の聲を聞いたので
 阿母も 母ア、さうか、お前来て御呉れか、都にございませぬ
 て居るといつ何時何う云ふことがあるか知れんもので、もうお
 前には逢へまいと思つてネ…… 光蔭何う致しまして何うか
 と思つて云ふことでもございませぬらうか……

西遊記

暫らく前にも参りましたものを、間際にかりまして……
 エ、
 が併し成るべくお前に苦勞を掛けまいと思つて、縁にお前は御
 役人様で何か學校へ出て事をしなればあらい、其人を従ら
 に呼ぶと云ふことは不都合と思つて、ソレゆゑ實は死ぬ時に呼
 んで呉れど村の者へ頼んだので……
 を遊ばしては賊に手前迷惑を致す是から何處へも参りません
 御全快に参りますと、御供を致しませぬ、就いて書面
 では豫ね、申し上げて置きましたか未だ御目に懸りませぬ
 は初めてございませぬ、是か都に於てさる人の媒妁にて、眞
 したる手前の妻でございませぬ、温嬌と申しませぬ者で、何うか御
 目を御覧下さるやうに。夫の官業に温嬌は其所へ出でまし
 て、温嬌は、口懸りませぬ手前は温嬌と申しませぬ不束者

西遊記

でございませぬ、御母さんの御病氣を承たまはりましたして、驚ろき入
 りましてございませぬ、何分にも行届きませぬ者ではございませぬ
 が是から御側に居りましたして、良人同様孝行を致しませぬから……
 ……と、物温順く言ふと、阿母も大層喜こんで、母嫁の顔も見たい
 と、思つたが、ソレも心ならず、ツヒ、日を重ねて居る中に、此
 病氣、却つて病気が幸ひで……ア、大層美しい容貌、髪の様子など
 と云ふものは、都は又別段、田舎とは大層を違ひ、斯う云ふ姿を見
 れば、私にも大きに安心をさる、早く孫を拵らへて喜ばして下
 さい、光慈、セツ出来て居ります、母、オヤ、さうかい、大層早かつ
 たか、光慈御母様、御喜こび下さいました、臨月も間近にあつて居
 りませぬ、母、本統に能くさうやつて仕込んだもので……さう云
 へば、眼が大きいネ、容貌が美しいから少し位、御腹の大きいのは
 知れない位、此方へ出して御見せ……成程、大きな腹だ、光慈御

西遊記

母さん突ついちやア往けません。お老人と云ふ者は位々一人の
悴光蔭が参り殊に容貌も美し温順な縁を同道をして来て呉れ
たので大きに安心をしたか、もう往けあいと思ひました。病氣が
段々快くなつた、どうも村の者も大きに喜こび之に掛つて居る
醫者も大きに喜こんだ。其中に藤りまそのは早うございませ、今
日は起居働作も出来るやうになつて来た、けれども中々年老つ
て居りまゝから達者とは云ふ條田畑仕事をすると云ふことは
出来ない、又させも致しません、母光蔭やお前が来て呉れて大
きに私しも壯健にあつたよ。光蔭どうも御母様は心が全体御
壯健なのでございませ、母私しはまだ壽命が少とはあると思
えて御粥ばかり食べて居ると何だか眼が空つて往けないが、今
日は私しは鯉を食べて見たいと思ふが……光蔭エ、是と思
召を物を御注文下さい、左様致しませれば何でも差上げませか

西遊記

ら世私しも病氣中に牛乳やソップは飽きて仕舞つたから
う止せよ、私しは昔者だからあんな物を飲むよりは御粥か何か
食べた方が宜いから、どうか鯉を煮て貰ひたいものだ。光蔭エ
、承知致しました、早速に是から鯉を取寄せまして、恐ろしい大
きな鯉だ、鯉桶の中に刻ねて居りませ、母、どうぞ光蔭お前
ソレを料つてお呉れな。光蔭エ、宜しうございませ。母に與へ
ませる物自分で料つて食べさせたいと思つた光蔭、鯉桶からソ
レを出して粗板へ上せると、鯉位剛毅なものとはございません、粗
板へ上つて庖丁の背の方で三度擦りませると、どんを鯉でも
ッ動かかない、ソレだけ鯉と云ふ魚は覺悟の宜いものでございま
そ、殺されると思ふと少しも動かない、今光蔭が其鯉の背を二三
度擦りませると、ピカ／＼ピカ／＼其光りと云ふものが中々容
易ならん光り、固より學者の光蔭でございませ、から、ソレ／＼と

其鯉の様子を見て居た、又庵丁を當てやうとせるとヒカリ光る
 光蔭御母様御とに恐れ入りましてございませぬが、今日は鯉は御
 止しなすつて下さることにばかりませぬか、世さうかい、鯉
 を食べちやア悪いかい、光蔭召上がるのが悪いのぢやアござ
 いませぬが、此の調へました鯉は、どうも其の光りを放ちませぬ
 こと夥だしく、實に恐れ入りましたるもの、生きて居りませぬも
 のを鑑りに殺せど云ふのも誠に心に済みませぬ、今日は鯉を
 御留り下されて何か外の物を召上つて下さいませぬか、強てど
 有れば料理も致しませぬが、餘り光りを放ちませぬ尋常の鯉でと
 さいませぬから、ソレよりは裏の川へ之を流してやりましては
 此さまの御壽命を祈りました方が私くしは宜からうと思ひま
 せ、世ア、さうかい、私しは食べて見たいと思ふただけで強て
 食べなければならぬと云ふのでもないから、ぢやアまア今日

は鯉を止して煎豆腐にでもして置かう。此老婆さん狡猾な老婆
 さんだ、鯉が煎豆腐に變つて仕舞つた、光蔭さうして下さいませ
 すと私くしも大きに安心致しませぬから……アは鯉よ御母様の
 御病氣が癒つたとは言ひながら、御年老のことだから、此上共に
 どうか御母様の御壽命を守らうにして呉れよ、ソレ助けてや
 るぞ。と鯉桶の中へ入れる、とバチくバチくと割ねて居るが
 物でも言ふ者から有難うございませぬと云ふやうに見える、光蔭
 其儘にして鯉桶のなり持つて参りましたるは、隔々ど流れて居
 りませぬ大河でございませぬ、鯉桶より出して之を河へ流せ、鯉は三
 度躍つて其儘に沈みませぬ様子を總て魚と云ふものは助けてや
 ると其儘には水中へ遣入りませぬ、二度三度位躍りませぬ、生ある
 ものはソレだけのことを知つても居ると云ふやうなことで
 ございませぬ、扱阿母は其後全く快く相成ましたから、光蔭

遊 記

サア今度には是非御同道をしませう斯ふ云ふことがある
遠方では大きに不都合でございませぬから一踏に行つて下
いと云ふと何分にも阿母は母どうも私しは病氣が癒つて見
ると此方に居る方が宜い、餘り繁華な所へ行つて、さうでもない
火事でもあつた時に困るから、さうか光慈や強情を言ふやうで
済まさいか私しは此方へ置いてお呉れ、さうして今度にはもう風
を引いても直に手紙を出すやうにするから、お前方に心配を掛
けさいゆゑ何うかさうして貰ひたい。幾ら言つても母がさう云
ふものでござい升から固より孝行の光慈温嬌の二人が光慈
ソレおら母上の意に従ひまして何うぞ御風を召しても物三日
と御寐みなせつたら右の次第を御知らせ下さいませやう、彼地
へ歸らなければならぬと云ふのは、もう臨月も近くありました
ゆゑ彼地へ送つて産婆の方も用意がしてございませぬから、身二

遊 記

つに相成りませれば必ら其事を申越しませぬから……
さうか光慈や子が生れたら直に知らしてお呉れよ温嬌此上此
に身体を大事にして……温嬌御母さん誠に相濟ませぬが左
様なら一時都へ戻りませぬやう仕まつりませぬ 光慈殊に手前
は役目の方でさう長く居りませぬ譯になりませぬから 母尤と
ものことだ、さう云ふことにして……と話しは早速纏まりまし
て光慈村内の者或は庄官へ對して万端の事を頼み、十分に手當
の金などを置て扱夫婦の者は再び都へ戻りませぬ、二日路ばかり
は別段に御話もさい、洪江と云ふ川の所まで参りませぬと川橋
うして何うしても船でなければ渡れませぬ所、茶屋へ腰を懸け
て渡し船の此方へ来るのを待つて居る向ふから来たました渡し
船頭が二人でございませぬ 甲且那方御渡りかネ 光慈ア、
船頭さうか渡りたいたいのだ 甲斯う云ふ所での中に五回

西

遊

記

か七回しか出さぬからマア緩くり休んで貰たいもんだ、此中に
 客人か溜るどソレから渡そから 光蔭尤もだが五人前でも
 八人前でも出から何うぞ迷惑だらうが直に渡して貰いたいも
 のだ 甲「さうかネぢやア何うしやう、此旦那は直ぐに渡して呉
 じや有るんだか……」 乙「マア阿兄御急ぎの旅でもあらうか
 ら直に渡して上げやうかい 甲「ぢやアネ旦那様濟まねへけれ
 ども何うか八人前貰いたいのんだ 光蔭「ア、八人前が十人前
 でもやるから 甲「茶店に誰も居ねへかネ 光蔭「此通り休息所
 はあるが、誰も人は居ね、煙草の火は無此處に暫く居障にもあら
 んから 甲「ソレは御尤もだ、サア〜 御乗なさいまし……ヤア
 御夫婦連で大層マア奇麗な御内儀さんた……危ねへ〜 汝此
 方へ手を引いて上げる。一人は三十五六にあつてる目のキ目口
 りどした件だかものそこい面をして居る一人は二十七八にあ

西

遊

記

ある矢張船頭阿兄と云ふ方が劉洪と言ひまして弟を李彪と申
 そ者光蔭等は何にも知らぬから其船へ乗移りませる、サアッ
 ツと云ふ流し渡しに渡るのでございませす、劉洪御女中船級へ
 廻ると危ねへ、モット此方へ寄んなさい、此處に是から二町ばか
 りの間水か両方からの落口で危ねへ所だから氣を付けて居お
 せへよ…… 李彪一寸來い 李彪何だ 劉洪何うだい、モッ宜か
 らうかネ 李彪「モッ宜いやッちまへ〜 二人共に例もの通り
 やッつけるが宜い 劉洪「往けねへ野郎は叩ッ殺したつて稱は
 ねへが、女は見ろい俺は今まで色々の女を見たが此位美しい女は
 見たことばねへ、此奴を殺して仕舞つちやア歸らねへ是は當分
 俺の妾にするんだから…… 李彪「どうも阿兄は懇張つて助借
 だな、阿兄はかりか 劉洪「嘗り前よ 李彪「俺にだつて偶には貸
 して呉れたつて宜からう 劉洪「さうは往かねへ、重箱とは詮は

西

遊

記

ア、宜いか汝は女を捕へて居る。李彪、宜し、合点だ。何か二人コソ
 話をして居る。此方が武蔵者と云ふではなし、固より大
 者のことで何を相談をして居るか、二人共に母の病氣のことに
 付いてコソ話をして居る。中に二人あがら棒を引上げて
 流れ次第に船を流す。沙々たる所でございまして、四邊に船と云
 ふものは一艘も無く、誰も見えて居る者もあゝ突然に此李彪と云
 ふ奴が来て温婦の衣服へ手を掛けるから、温婦ア、何をなさ
 る。と云つても其所へ引据えて、李彪、御女中決して悪戯をなさ
 のぢやアねへから、此處は水の淵、落しし所で、其様に船縁へ腰を
 掛けて居ると危ねへから、此方へ寄んさい。温婦、さうでござ
 いませか。とワナク、置きて居る。光蔭、コレ、船頭、何をす
 んだ、無闇に女を捕へてさう云ふことはあゝ、劉洪、やかましい
 やい、ヤ、他は普通の船頭だと思つてゐるのか、コレ此渡し場に

西

遊

記

居てな、幾らか金を持つて居る者が呉れば叩つ殺し女を連れて居
 る者があれば、女は取つて野郎を殺そのを商賣にして居るんだ
 海賊の劉洪と云ふのは他だ。光蔭、エ、ワ、探はッ……と驚ろい
 たる陳光蔭、光蔭、コレ船頭さう云ふことあら有合せの金も持
 つてる品物も幾ら、お遣はせゆゑ何うか一命を助けて貰ひたい
 もんだ、私は手向ひをした所が順と順に覺るもあし、中々手向ひ
 をしても叶はん、何うぞ命を助けて呉れ、強者は江州の一國を賜
 はつて、則ち偽徳を致して居る、陳光蔭と云ふものであるから
 ……劉洪、何を吐しやアがるんだ、籠絡め助けることは出来ね
 へ、光蔭、是れはさうも情け無い學問は有り、と雖ども陳光蔭さ
 か、腕前では及ぶ所ではございませぬ、温婦は驚ろいた
 温婦、ア、情けあゝいこと何うぞ、良人を助けて私しの命を助けて
 下さると云ふ中も、李彪はッ、カ、温婦を捕へて居りませ、其の

中に劉洪は傍にあつたる得物を取上げたることにして打つて
掛りまゝから陳光蕊も是れまでと心得たから 光蕊已れ其
あらば……と用意を致したる劍へ手を掛けやうとするとヒシ
一ツ一つ撲たれたアアと仰向に倒れる所を飛掛つたることに
して散々打つたから何かは堪りませう、急所を打たれたものと
見えて光蕊其の儘息は絶えたる様子、側に見て居りました温嬌
は温嬌コレ情け無いと夫の死骸へ取り纏らうとすると所を幸
彪が離せばこそ、シツカリ之を押へて居る女の方でございませ
から振放すことが出来ぬ 劉洪押へて居る此野郎學者もね
へもんだ、モウ死んぢまやアがつた。聽て重石を付けてドオーン
と川の中へ投り込んで仕舞つた其の儘にして光蕊の死骸に於
ては千尋の海底へ這入りましたものと見る 劉洪サア女も
仕方がねへ、是から俺を亭主同様にして居れば宜し、恩圖々々し

やアがれば叩つ殺して仕舞ふ是から家へ連れてつて抱籠めるの
だ、否、應言せねへば 季彪阿兄金は何うした 劉洪ア！飛たこ
とをしちやつに 季彪何うしたつて 劉洪金を取ねへ中に投
り込んぢやアたんだ 季彪馬鹿だな 劉洪手前は何のため
にしたんだ 季彪何のためにしたつて俺は女の方を打つて居たも
のだから……阿兄だつてさうぢや無かやツつければ金を取る
のち當り前ぢやねへか、ソイツを女の方ばかり見て居て、ペーロ
シヤにあつて居たからだ 劉洪女も少とは持つて居るだらう
季彪女は殺らも持つてやしねへ 劉洪話らねへことをしたあア
季彪話ねへツたつてお前がしたんぢやねへか、温嬌は其儘にし
て水の面を見て居たが、もう死骸に於ては聊かでも重石が付
居るから浮かう筈がございませぬ、ア、情けないことだ、寧ろ一
思ひに此場に至り死なうかと思つたが、却此温嬌と云ふのが中

西

遊

記

々ゑらい、どうも八月にもなつて居て、此儘自分が水中へ身を投
 じて仕舞へば子供を失なう、未だ男女の様子は分らぬ、是れ
 光慈の胤何うぞ此子供を生かしてから死なふ、ソレから冥土へ
 往つて言譯をしやう、斯う云ふ者に見込まれたるからは自分の
 身は如何様になつても子供の命を助けたいと思ひました、此温
 嬌の腹へ宿りましたのが彼の申上げまゐる位、此間へございま
 さう思ひますから言が儘に此悪者の即ち自由にありました
 ものか………扱御話別れて光慈は忽ち此間に水中へ入ります
 ると ○其處へ御出なすつたのは陳光慈様では無い、ませんか
 光慈「誰だ、い貴様は………」 ○誰だつて私くしてございます、何う
 なすつたんでございます、大さな石を腰へ懸付けて………光慈付
 けたくは無い、いければ、付けられたのだ、何だ、貴様は、様子を見る
 とピカ／＼、光つて居る近づく儘に見ると、頭へ恐ろしい、大きな

西

遊

記

鯉が乗かつて居る、鯉何つちやア、ございませぬ、私は海州で
 貴所に庵丁で切られやうとした時に、助けて御貰い申した鯉で
 ございます、光慈ア、さうか、鯉へ、何うして又貴所は此方
 へ御出なすつたんで、尋問條業でございませぬ、光慈、尋問條業
 ではない、實はコレ、斯う云ふ、鯉へ、エー、何でも此川に
 は、どうも悪い者が居ると云ふことを聞きました、が、ちやア、其悪者の
 爲に、貴所は、殺されたんで………光慈、殺されちやつた、石を腰へ
 付けて、此通り沈められたんだ、鯉、ア、御待なさい、歩けます、ま
 石を取って上げ、まゐり、此水中へ御出なされば、私くしの方が、馴
 て居ます、私も役をして居るんです、から早速に、此事を龍王へ
 申上げて、お前さんを御助け申すやうな、こと、に、しませう、光慈、
 助け、る、つ、た、つ、て、モ、ウ、虫、の、息、は、か、ま、だ、鯉、お、前、さん、餘、程、も、う、危
 ない、魂、の、緒、が、切、て、居、る、様、子、だ、此、地、帯、ち、や、ア、何、で、ご、ざ、い、ま、す、か

西遊記

ら一旦助けにお買申したんで、物には謝するの禮ありと云つて
助けにお買申せば助けて上るのが當り前だ、殊に貴所は陳光
慈と言つたら廣大無邊の學者たつて其人を殺して仕舞つちや
ア謂らぬ、私くしが行つて歸しをして上げますから……と鯉
は忽ちちの間に龍宮城へ参つて此次第を龍王へ話しをせる、龍
王ソレを聞いたが龍王認て聞及んだ陳光慈さう云ふ事では
不憫であるから此方へ連れて來いと云ふので早速連れて參る
龍宮城へ來た時はモウ魂の緒か切れんとして居る龍王不憫に
思召して地獄へ照會して陳光慈の魂を取返す、斯う云ふ人を殺
しては残念だ地獄へ電信が利くと見えて掛けたから則ちは驚
ろいた、聞處今此方へ寄越した陳光慈の魂を返さなければな
らん、龍王から電信が來た、船んで來て見れば仕方がないから又
返してやらあいと怒つて津浪でも寄越されると堪らないから

西遊記

返してやれ、龍王の求めに依りまして茲に陳光慈の魂を再び戻
して寄越した、其魂を取寄せて陳光慈に與へだから其身は悉と
く壯健にあつた、併し是は龍王の周旋に依ります所、龍王へ拜
顔をした時に陳光慈再拜して光慈吾れ斯様なる姿になりし
を御助け下し置かれ辱けけまい、一旦鯉を助け置いたから吾を
助け呉れると云ふは是れ人情の然らしむる所とは言いかから
實に恐れ入つたること辱ぢけまいとあつて三拜九拜をせる龍
王の曰く龍王今汝世に立たんとするど離ども時期早くして
却つて再び滅するやうあること來るべし、暫らくの間此龍宮に
留まるべしとある、光慈其意に従ひまして龍宮に暫らく留まる
ことになりましたから、茲で學校か何か立てた、船だの餌、皆な
積古にやつて來る、御話別れて茲に温嬌に於ては心ならずも唯
子供の生れる日を待たうが爲に悪人と知り夫の敵と知るがら

第十一席

劉洪の心に從つて居りまする、

最早臨月と云ふことになりましたるから温嬌は唯情け無いこと
 と思ひ今日しも悪黨の劉洪は何處へ遊びに行つたか不在で
 ございまして一人樂しからせ机に凭れて未越方のことを考へ
 て居る、起すものがあるから温嬌扱はと思ひ目を開いて見れば
 一人の行者如何に温嬌汝の腹を借りて宿りたる其子は
 觀世音の思召しを以て其方の腹を借らしめたるものにして必
 ら生ぜざる男子は天地に類ひ無き逆れの貴僧になるべき者其
 男子は菩薩の思召しを以て今日引取らしむる、又光蕊に於ても
 龍宮城に在つて其魂を呼迎へ今無事にして彼の所に在り、日
 らせして光蕊にも再會致せし、夢々疑ふこと勿れ、吾は南極星
 君なり。吾を忘れて返事を致しまする途端に目が醒めた見ると

西遊記

西遊記

殘る形なき楠柯の一夢 温嬌は、一扱は夢を見たか併しあが
 ら夢とは言ひあがら吾が腹に宿りたる子供が名僧にあるとは
 何よりのこと又夢にだに夫光蕊が魂の緒を呼戻して無事に龍
 宮城に居ると云ふは喜こばしきことあり。と思ふ途端に胸痛み
 此の被ぶると云ふことでございませうか、温嬌扱は是は産の氣
 が付いたか、觀世音菩薩今日我子を引取ると云ふの夢扱は浮世
 の風に當り給ふかど一人胸を撫で腹を探りまをる其中に左は
 かり苦勞をした機もなく、賦に易々と男子を生んだ、漸うのこと
 で胞衣を切り旁々したが、一人で取上げると云ふは容易あらん
 こととございします、血染れにあつて頻りに其子供を用意の湯が
 ございませるから、是で洗ひ淨めて居る所へ、一杯機嫌で劉洪歸
 つて来た劉洪何を其處で騒いで居るんだい。劉洪の聲に扱は
 と思ひ震ひ上りましたる温嬌は 温嬌見て下さいまし候難致

して居りましたのが、今急に虫氣付きまして易々と男の子が生まれました。劉洪何を餓鬼が生れた飛んでもねへ本統に腹を引裂いて出して仕舞へどあの位言つたんぢやアねへか、其生れた子を何うするのだ。温嬌是から私くしが育てます。劉洪馬鹿を言へ、ソレは陳光蕊の胤だ其様なものを育てられて堪るものか。温嬌助け給へ。飯令何でも生たる者此世の中の風に當つたのが今始めて如何に情け無いとは言ひながら此子を殺すと云ふのは……劉洪往かねへ斯うやつて置けば大さくなつて何をするか知れやしねへ。今の中殺すのだ。虫を潰せやうなものだ。蚤も蚊も同じことだ。エ、退かねへか叩つ殺して仕舞う。と突然に傍にあつた棒を振上げて生落したばかりまだ血腫さい子供を打たうとするから温嬌驚て、温嬌暫らく待ち給へ。美の言ふこ

とを一振り聞いて下さるやう、成程陳光蕊の胤之を育てることには出来な、殺すと云ふことなら強、助けて呉れと云ふても逆も助けては下さるまいから同じことあら其棒を以て打殺して仕舞ふよりは幸ひ此裏の川へ板へ乗せて之を流す時は必ら此魚の餌食にあるに相違ない何うかさうして下さるやう是は私くしの頼みでございます。劉洪さう貴様が云ふなら同じことだから早く板へ乗せて流して仕舞へ俺は今一寸用があるから行つて来る間に乾度流して置かねへど打捨つて置かね。首ひ捨て、劉洪は其儘に出て行く鬼ども何ども言はうやうなき所の彼の劉洪の有様、後影を見て涙を流して居たる温嬌、其儘にして吾子を抱いて、又此處に長く助けて置いたから、歸つて来て必ら老や手を下して殺すに相違ない事を仕方があひから……オ、最後の夢に觀世音菩薩が引取と仰せられたる夢、必ら老是故

西

遊

記

御引取下し置かれれば何よりのこと吾家に在らうよりは川へ
 流し亂世音菩薩に一命を助けて観くのが何よりと思ひました
 るから温婦腹を鬼に致して裏の岸邊に出て見てあればザア
 くと云ふ水の流れ又岩多くして其深さ何尋とも知ざるや
 ある所の大河でございます幸ひ一枚の板がありましたるから
 其板の上へ今生落したばかりの子供を乗せ流す時に臨んで温
 婦が何かの印と思ひまして四邊の様子を見たらもう今更歸つ
 て物一つも書いてやる譯にありませんソコで小指を喰切りま
 して用意の布へ巨細には書けまいが割洪の悪事今日の始末ソ
 レを豫じめ認めため親の敵は割洪と云ふ者であると云ふふとを
 書いて之を其子供の左の手に結び付けて其儘に板に乗せて押
 流さうとすれど親子の情愛流石に流すこともあらま今一目顔
 を見てと思ふ其中に又もや向ふに人聲は割洪戻つて来たに相

西

遊

記

違ふい、話對手にあつて来るのは其分の李彪であらうか二人が
 來れば逆も命を助けることはあるまいと思ひましたるから、
 心を鬼に致し、流したることゆゑ其儘にザツザツ
 サアと其川の面へ出ました浪のまに風此板のまに
 へ飛つて居ります所の子供に於ては流れくへ行此板く様子其
 見える間と云ふものは柳の下に佇んでア、扱は彼所へ流れて
 行くかと思ひますると何の位胸を痛めまするか知れない、其
 する中にもう影も見え相成りましたるから温婦は暫らく其
 所に泣き叫んで居る所へ二人歸つて来た割洪何うしたく
 流したか温婦ハイあの通り遙かの沖に流れて参ます割洪
 ム、それで宜い、手前がさうでもねへ、愚圖々々して居やがるど
 叩ッ殺して仕舞はうと歸つて来たんだ、サア家へ這入れくど
 二人で手を取つて温婦を家へ引立つて参りましたが、自分にも

西

遊

記

此の始末、當人の傲き悲しみは別段でございませぬ、時に御話しは別れて彼の板の上へ乗りました子供幸ひにして是が無事に四五日の間と云ふものは唯流れくつて参りまして金山寺の麓の岸に着いた所が金山寺の長老法明和尚御弟子を四五人連れて渡舟をされた、法明コレへ向ふに見えぬのは何ぢやあ弟子、左様でございませぬ、板の上へ何か乗つて居りませぬやうでございませぬ、法明ア、私にもさう見えるが何であるな、其中に段々近づいて来た弟子御師匠様子供でございませぬ、ソレが板の上へ乗つて居りませぬ、法明世に邪堅お奴があるものだ、大方子供を板へ乗せて流したものであらう、何うかして此方へ……と云ふ中に岸の邊りへ替いた其所へ参りまして死して居る子供であらうかと思ひ、和尚其左の手へ結んでありましたものを自身に解いたと思ひ、和尚其左の手へ結んでありましたものを自身に解いて見ると、思ふと腹中をした流石は法明和尚も剛い之を大勢の者へ知らせると宜のしくないから大勢の者へ見せないで委細の事を血を以て書いてありませぬものを隠して仕舞つたソレで是から當人の幾方村内の者へ申付けませぬ、サア道徳堅固ある長老の御願みでございませぬから村内の者も尋つて介抱を致しませぬ、其中に乳のありませぬ者が早速之を預かり手當を致しませぬ日に増して壯健に相成つた様子七歳まで別段に御師がございませぬ、七歳までは農家に育ち七歳に致して始めて金山寺へ之を伴ひました、當人も七つにもあつて居りませぬ、幾分か人心が付いて居る、當人も出家を望みませぬ所から

西

遊

記

りの子供の様子、併し浪のまに幸ひにして命を得て此所へ来りしは能くくのものであらうから何うぞ是は助け遣はしたと思ひ、和尚其左の手へ結んでありましたものを自身に解いて見ると、思ふと腹中をした流石は法明和尚も剛い之を大勢の者へ知らせると宜のしくないから大勢の者へ見せないで委細の事を血を以て書いてありませぬものを隠して仕舞つたソレで是から當人の幾方村内の者へ申付けませぬ、サア道徳堅固ある長老の御願みでございませぬから村内の者も尋つて介抱を致しませぬ、其中に乳のありませぬ者が早速之を預かり手當を致しませぬ日に増して壯健に相成つた様子七歳まで別段に御師がございませぬ、七歳までは農家に育ち七歳に致して始めて金山寺へ之を伴ひました、當人も七つにもあつて居りませぬ、幾分か人心が付いて居る、當人も出家を望みませぬ所から

西遊記

長老の御弟子に致して江流と云ふ名前を付けた、扱ソレより致して段々佛學を教へて見ますと此者どうも奇才でございませう、明智にして七歳八歳の時より致して學問の上では大人も舌を捲く位でございませうから愈々法明和尚に於ては末を樂しみと思ひまして之を養ひ、既に十八歳に致して法名を玄奘と改め道徳の出家をさせる位十八歳になりまして、もう他の老僧が分らんことがあれば玄奘に聞くと云ふやうにありました、教へると雖も其國に渡り一度學んだることとは二度聞くと云ふことがない、非凡の僧とも申しませうか、誠に管人に於ても大いに今日までの和尚の教育を喜こび居りました、然る所が一日人を遣さけて法明和尚假近く玄奘を呼んで法明玄奘此所へ参れ、玄奘へエー長老何か御用でございませうか、法明イヤ疾うより物語を致さうと心得て居たが今更で此場合も無く物語も

西遊記

致させ、又見せも致さんであつたが、もう其方も十八歳にあつて居る、今日は改めて其方に見せるものがある、玄奘へエー何う云ふ佛書でございませうか、法明イヤ、佛書ではない、御取出になりましたのは布一血を以て書てある、玄奘何事と思ふてソレを敵度編返し願んで居る中に顔面眞青になりました、玄奘へエー法明是まで何と尋ても其方の出生を言せ語らざるは即ち此故だ、十八年以前に其方は此岸へ流れ來りし者、其方の父は唐の太宗皇帝の御前に在て儒術をも致したる者、陳夢玄を光慈と云ふて、適れ天下に名有る所の學士又其母たる者は瀧嬌と云ふ者、ソレに書てある通り悪人劉洪の爲に一命を絶たれ、尙ほ其上に其方出産の時に即ち押流されたのである、此場に至り物語り致すは始めて、ある其方の父の敵と云ふのは即ち劉洪と申す者、又ソレに力を添えた李彪と云ふ者、此二人こそ其

方に取れば父の敵山家として敵討をせよとは申さんが併して天
道を守つて必ら走や其敵討をさせてやりたい其方も必掛けて
其劉洪と申する者を官に願ふて其討すべきことを思ひ又二ッ
には母温嬌にも對面を致して其方の無事をも見せて遣はすや
うにしたいと思ふ就いては今より旅僧の姿になつて汝江州の
地に至り尋ね當つて温嬌に其次第を語るやう致せ 玄奘へエ
、御師匠様の仰せ如何にも有難きことに存じ奉まつり申す手
前に於ても右様始め承知致したる父の敵其許に今日居り申
する母の志しを思ひますれば誠氣の非にも思ひ胎内に此玄
非があるが爲に母に於ては心から走も其賊の爲に身を任した
るものに相違ございません依つて唯今より私くしは仰せを受
けて御許しのあり申すから江州に趣むいて其母温嬌と云
ふものを尋ね親子の對面を致し申すれば何より存じ申す

から……法明ければ此郡は他の者へは必ら走言ふ其方
唯佛學修業の爲に參るとして田で又母に對面を致したら直ぐ
に此金山寺へ戻り其上に長安の都へ行き役人官吏へ之を訴つ
て早々罰するやうに致せ父の敵を討たしめて遣はすから大い
に喜こんで玄奘旅の支度を調え白い手甲に脚半鼠の衣服袈裟
は勿論のこと鐵鉢を持って立出で人の門へ立つて一錢二錢の合
力に與かる化縁の僧ソコで此江州へ來りました大いなる川を
越して參ればこそ三日も五日も流れくつて來たやうなもの地
續きにして參り申すれば一日で行ける所と見える江州の地へ
來たければも扱温りに名前を尋ねる西にありません劉洪と云
ふ人の家は何處だと聞いて宜いやら悪いやらさう云ふ奴だか
ら劉洪に先に逢ふたら一命も危ふいと心得ましたト云つて生
れた時に別れた母顔を知らう筈はございませんから玄奘唯家

西

遊

記

毎に遊戯しては錢を呉れても呉れまいでも留まりまして
を致します。一軒の荒屋、佇んで經を讀んで居りますと、上げ
ます。實に見る影もない姿でございます。女御、傍者、コレへ入
れまゝ。と持つて居たる鉄鉢へ少錢を入れて呉れた。玄奘押
いた。ありに此所へ佇んで經を讀んで居ると、今錢をソレへ入れ
ました。外に人も居ないのを幸ひ、女御、傍者、何方の御方で
さいます。玄奘、手前は金山寺の僧でございませぬ。女御、名
は何と仰有います。玄奘、玄奘と申します。女御、誠に恐れ入
りました。が、私くしは、最前から貴所の御容貌を見ると、別れ
る。良人の面差に能う似て御在なされるが……。と、半分聞いたる玄
奘は、傍に彼の鉄鉢を置き、玄奘、扱は温婦と云ふのは、貴所では

西

遊

記

ございませぬか。温婦、エ、ッ、何うして私しの名を知て、玄奘、
エ、ッ、母上でございませぬか。と袖へ廻りました。から温婦も
ろいて、温婦、母とは何事、シテ貴所は、玄奘、云々、斯様、斯う
云ふ。四、十八年以前、御師匠様の爲に助けられ、人と成つて初めて
の名前を江流と音ひ、ソレより故ため、玄奘とあつて、此度御師匠
様の御許しを受けて、貴所に御目に懸らうと心得て、此所へ
参りし者……。と聞いて驚ろいた温婦は、暫らくの間、玄奘の面を
見て居たが、温婦、エ、ッ、お前に逢ふのも恥かしい、身二つに
なりたる。死には死ぬと豫て覺悟をしたが、悪人等に周圍を取
かれて居て、死後、死して仕舞ひ、其中に朝夕を過して、最早十八年の
今日にあり、今は夫のことを忘れ、と云ふては、済まされぬ。唯、職
入るの餘り、川へ流した子供は如何致したと、其事をのみ思ふて
居て……。玄奘、イエ、御無事で御在にありましたのが幸ひ

此上からは右の次第を御師匠様へ申入れを致して思召しを承
 たまはり猶上へ願ふて早速に始末を付るやう致しましから御
 母様必ず氣を確乎して下さいませるやう 温嬌お前にさう言
 はれて見ると私しは一言の言辭も無い能くマア此所へ尋て來て
 呉れた。と親子の對面暫らくの間は袖を濡して居りました。其
 に立契は 立契私しは早速是より金山寺へ一度戻りまして右
 の次第を御師匠様へ申入まして、少しも早く御父様の敵を討て
 貰ひませるやう、上の役人へ願ひませる積り何ぞ貴所は無事に
 此所へ居て下さいませるやう。と堅き約束を致して別れました。も
 うさうとると修業をすることもありませんから是れより直ぐ
 に金山寺へ戻りまして、右の次第を法明長老へ申入れたるから
 長老も大いに驚おいて直ぐに立契を同道して長安の都へ至つ
 て其向へ此次第を長老より致して届けた金山寺の法明長老と

云ふたら道徳堅固殊に立契と云ふ者其隠匿を語りましたるか
 ら上の役人に於ても大きに驚おいて早くも此事を太宗皇帝へ
 對し奏聞を遂げたることゆゑ、皇帝大いに御驚ろき遊ばし、右様
 ある者を其儘捨置いては相成らん、早速其悪人を問ふべしと云
 ふ、奉命丞相殷開山へ對し仰せ付けられた、丞相殷開山と云ふ人
 は今で言ふと司法大臣と云ふ役かソレども警視總監と云ふや
 うか先づさう云ふ役をして居る御人でございませから直ぐに
 部下の者を引連れたるよとにして江州へ向はれました悪者で
 も何れでも巡査さんが大勢來たから仕方がない、忽ちちの間に劉
 洪李彪の兩人は此所に於て縛された逃げんとしても逃る譯に
 かりません、此中に段々取調へにあると常人等もう隠れごとが
 來あい、是までの間に一人や二人ではあゝ、多くの人を殺したる
 ことを白狀を致しました、依つて盡く之を死罪給木に掛けるど

西遊記

云ふことになりまして刑場と云ふのは川の岸邊でございまを
此方と言ふと鈴ヶ森と云ふやうな所で、前に川を扣えて居りま
と、其處で事を遂げる其當日に於きましては、役人一同此所へ進
む、玄奘始めとして開山等其所に至りまして之を見て居る、玄奘
は親の敵でございませしが自分出家であるから手を下しません
當人の死を此場に至り見届けやうと云ふ積り温婦に於ても耻
かしいから其所へ出で居りました數万の見物も様子を見て居
る、今や刀を上げたることでございまして、此場に劉洪の首を上
げんと致して居ると、ザツ／＼と川中に物音が致した
是れ何事であるかと云ふと、丁度此劉洪李彪の兩人死刑と云ふ
の其前日に巡海夜叉此事を海に於てスツカリ聞いて直ぐに龍
宮に注進した夜叉愈々云々斯様斯う／＼云ふ時で劉洪李彪
の兩人死刑に相成とのみとでございませぬ。龍王之れを聞いて

西遊記

龍王ソレは幸ひもう仔細はかいから光慈に於ては唯今より世
に出、再び皇帝に仕へて忠勤を勵みあさい、依て殿内をして遣は
せから其刑場へ趣むいて夫婦の對面を爲し、且つは子供にも益
ふやうにそのが宜い。光慈大きに喜こんで、ソユで巡海夜叉が案
内をして海をスタ／＼スタ／＼やつて来た今其刑場に至らん
と、その時に光慈、オ、イ暫らく御留まり下さるやう、陳光慈唯
今其所へ参り一言の恨みを述べたる上に其惡漢兩人の首を上
げるを見届けましたし、ど呼はりたり、名々是はと驚ろく所へ浪を蹴
立つて罷越したる者即ち陳光慈此時に至り細されて居つたる
兩名も大いに驚ろいた出張したる開山是を聞いて、開山汝光
慈如何して此所へ戻りしぞ、光慈さればあり吾龍宮城に在つ
て云々斯様一度魂の緒を失なひたるも龍王思召しを以て地獄
へ照會して吾が魂の緒を取戻し再び此所へ罷り越したり。之を

西

遊

記

開いて名々奇異の思ひを爲す時に玄奘は其所へ立出でまして
 玄奘の顔を見て居たが光慈父上と云ふからは我子たるかと
 らを見る温嬌は唯赤面をして居りましたが隨て光慈に向ひ
 温嬌云々斯様斯う云ふ譯でございませぬと委細語り尽そか
 と思ふと用意の刀物を取出し忽ち此所へ自殺を致した
 り、どうも亭主が歸つて来て見ると殺ら何でも暫らくの間其敵
 の爲に身を任して居りましたから生きて居られませぬ、光
 慈此時に至りまして光慈ア、何うも天あり命あり是非に及
 ばせ、如何に悪漢兩人其所に於て尋常に命を投げ出さしどあ
 つたる時に劉洪に於いても李彪に於いても唯其光慈の無事な
 るを見て大きに驚ろきました、其中に掛りのものは忽ち此の
 に悪漢兩人の首を其所へ斬落して桑木へ掛けました長安の都

西

遊

記

の人民は之を見物致して皆驚ろかざるはあし唯惜むらくは
 温嬌の自殺を致したのは不憫とは言ふ條、是れ亦女として取入
 らば其自殺を尤も共申しまするが、扱此度の機は漸う茲に其
 一段落を告げました、時に太宗皇帝へ右の次第を御聽に達しま
 すと帝に於ても光慈の徳を悉く信じませるやうあること依
 て此御方に文淵殿大學士の職を授けられました、此文淵殿の大
 學士と云ふ職は今日で言ふと大學總長と云ふやうなことで從
 三位か何かを授けられた、又玄奘の方は洪福寺を即ち賜はりま
 して此住職とあつて暫らく洪福寺に在る、其間に唐の太宗皇帝
 の命に依つて南天竺へ對して三藏の眞經を得んが爲に玄奘へ
 對して即ち其役を併せ付けられる、玄奘最も喜んで茲に南天
 竺に赴かんとする、追々悟空八戒沙悟淨の人々を御共に連まそ
 る一條に相成りませぬ、

西

遊

記

此西遊記は固より長いものでございませぬ、尤も其中には誠に重畳に渡るやうな所が澤山ございませぬから夫是れを能く扱差しを致しまして申上げませぬ、太宗皇帝が一度冥土へ参つて閻魔と約束をしたり或は劉金が死して太宗皇帝の命に従ひ瓜を冥土に届けるやと云ふこととございませぬ、是は餘りくだくしいこととございませぬから早く玄奘西天竺に趣かませぬ、一條から孫悟空始め名々の通力を現はします所を尋門として申上げるやうに致しませぬ、太宗皇帝は長安の都に在つて唯佛を悉く信じられませぬ、従がつて此都に於ても悉く釋かでございませぬ、茲に河南開封府と云ふ所に水を賣つて今日を以て居ります相良と云ふ男がございませぬ、此方で云ふと一荷五厘で持つて歩く水屋でございませぬ、誠にも貴しい業しをし

西

遊

記

て居りませぬ、女房を眼氏と云つて夫婦共に實に正直一途に務めて居りませぬ、此夫婦が佛を信じませぬこと一通りでございませぬ、女房は燐寸の箱を張つたり、幽燭の眞を捲いたり、さう云ふやうなことをして居るが、一生懸命に夫婦で食ふだけのものか、おればおとは残らせ門へ立ちませぬ、僧に施したり或は何處へ何う云ふ供養をせよと云ふことのみに使つて居りませぬ、若て居りませぬ物も一教あればソレで事足りるとして居りませぬ、位で近所の者が○お前のやうに其様に信心ばかりして居たつて仕方がない偶には骨休みをして酒の一杯も飲んだら宜からう、何處へ芝居にでも行くか浪花節へでも聞きに行つたら宜からう、なと云ふ者があるが何うして此人は浪花節などは嫌ひでございませぬ、同じことなら阿呆陀羅經を聞かうと云ふやうな賢い人で相良思召しは有難うございませぬ、私くしは何

うせ此世の中は仮りてございませぬ、浮世と申しませぬ位でいつま
でも斯うして居るものではございませぬ、あの世に参りまして
貴所様の側に居る方が長いのでございませぬ、彼方へ隠居所を拵
らへて置かうと思つて居りませぬ、縁いだつて仕方があいらし
女房に子供でもございませぬれば、残る子供に幾らか財産を分け
てやるおとど云ふやうなことがありませうけれども、私くしは
子供は無し、夫婦だけのことでございませぬ、家内の両親も亡くあ
りて居るし、私くしの両親は疾うに彼方へ行つて待つてゐるので
ございませぬ、私所方が何と仰つても何うも是ばかりは止
める譯になりませぬ、悪いことでないから、他から無理に止める
譯にもありません、何でもモウ一日に米が一升から一升炭薪の
錢が幾らなら幾ら、縁いだ中からソレだけ取つて、おとどは幾らあ
つてもやる、ソレも二年や三年ではない、夫婦になつてから數十

年やつて居るものでございませぬ、中には馬鹿だなど云ふ
人がある位でございませぬ、何と人に言はれましても、頼と人の
言ふことに構はない、日がな一日水を担いでやつて居ります位
或る日のことで八つ時分に仕舞つて歸つて来た、相良、張氏や
今日は御飯を食べるのが遅くあつた、張氏、さうでございませ
ぬ、一日位は御休みかと思ひました、相良、冗談言つちやア往け
ない、何かあるかい、張氏、何にもありません、其處に目差があり
まよからソレで御飯をお上んおさい、相良、目差か宜し……ヤ
ア目差が二つ半分しらいぢやないか、二つ半分と云ふのは何
うしたのだ、張氏、一把買つて、五つ差してありましたから、私し
が二つ半分食べたので、相良、さうか、頭は残つてゐるかい、張氏
頭だつて残して置きやアしません、相良、頭位残して置いて呉
れれば宜かつた、目差を二つ半分で御飯をソレ食つてゐる

西遊記

相良「御茶はまいかい 張氏「御茶が切れて無いんで 相良「さう
 か仕方が悪い水でやつつけやう……ア、一日稼いで来て、さ
 うして斯うやつア水で御飯を食べる程美味いことばあいの話
 しをして居ると門口へツイ〜ツイ〜 大勢の人が来る様子
 ハテ何であるかと思つて出て見ますと車へ積んだ金でござい
 まそソレが二輛や三輛ではございませぬ、車の二十四五輛も積
 いて来る様子、一つ車に三人五人も掛つて居ります、エンホイ、大
 勢を騒がせ相良之を見て居たが 相良「ヤア張氏見あさい何處
 へ送るんだか知らないが大層金を積んで来たぜ 張氏「是は本
 統に贈りたい金でございませぬね 相良「何うしたんだらうと云
 つて居る中に 車力「此處だ〜と車力さんが其處へ棍棒を突
 いて仕舞つた、車力「エ、御免なさい 相良「ハイ御出であさい
 車力「水屋の相良さんと云ふのは此方ではございませぬ 相良「左様で相

西遊記

良は私しでございませぬ 車力「今後から何でございませぬ、且那樣
 が御出あさいませぬが此金は皆んが貴所方の所へ御届けにあつ
 たんでございませぬから何うぞ受取つて下さいませし 相良「エ
 車力「お二人へ送るんでそれから受取つて下さいませし 相良「何處
 へ…… 車力「此方へ送らせ御届け申るのでございませぬ 相良「
 冗談言つちやア往けない、第一置所がねへや、老若ちやア往けま
 せん 車力「老若やアしねへ 相良「老若やアしねへつたつて私
 し其其様に金が何處からも来る所がありやアしませぬ、其様お
 ことを言はねへで水でも飲んで行きませぬ、一体何處まで行き
 ませるんだ 車力「お前さんの所へ来たんだ 相良「私のお所へ……
 ……何しに来たんだ 車力「金を届けに来たんで 相良「冗談言つ
 ちやア往まい其様お金を届けて来る者も爲し、又買ふやうな障
 もないから…… 車力「障が無いつたつて水屋の相良の所へ届

けろつてんで、委細は旦那が来て話するから 相良誰が来て話
 しをしたつて受取る譯はねへから其處等へ積んぢやア往けな
 い何で金を積むんだ。と云ふ中にモウ相良の家の前どなく後と
 なく、其金をドン／＼ドン／＼積上げる、夫婦のものは糺ろいて
 相良元談しちやア往けあい、家の前が金で埋つて仕舞つた、是を
 何うするんだ 車力二人して焼詣でも買つて食ひあさい 相良
 巫山戯ちやア往けあい、焼詣が其様に食へるものか。見て居る中
 に其金をエツカリ積上げて仕舞つた、相良夫婦は餘りのことに
 驚ろいて居る家の前へ出たり遣入つたりする中に仕舞ひには
 出ることゝ這入ることゝ出た、相良夫婦は餘りに金を積
 んだものだ夢ではあいか。と思つて察りに睡を捻つて見たり、相
 良を捻つて見たりして居る 相良、オイ張氏や何うしたんだら
 う跡らあい恐威をそる人があるぢやアあいか何だつて儲の所

の前を金で埋めて仕舞つたんだ、金があつた日には出入りする
 ことが出来あい、車力は歸つて仕舞つたし、弱つたあア持つつ
 て呉れつたつて持つては行かぬ………兎角して居る所へ轡を立
 てましたることにして、彼是れ十四五人の家來を連れて其所へ
 参りましたのが即ち長安の都よりの使、太宗皇帝よりの使節
 として胡敬徳と云ふ人もう年は七十に餘りまゐる人、此人の徳
 望は人の知所と云ふ人もう年は七十に餘りまゐる人、此人の徳
 を下げて居る 敬徳、ヤツ相良張氏と云ふのはお前か 兩人、
 左様でございます 相良、エ、貴所でございませうか此所へ金を
 斯やつて御届け下さつたのは……… 敬徳、ア、是は敬徳何も自
 身に送と云ふ次第ではあない、辱しけなくも帝よりして是は其方
 へ返すべき金だ、使つて送やかに是は受納さつしやるやう、別段
 に下さると云ふ譯ではあない、御返しになつたんだ 相良、エ、誰

へ返たのでございませぬ 敬徳貴様へ御遊になるのだ 相良
 が返すので…… 敬徳返す御方は太宗皇帝御前なりながら時の
 帝が御返しにある 相良「夢ぢやまいかい 是は……! エ、旦那様
 の前でございませぬが私くしは斯やつて水屋でございませぬ、
 其帝へ金を貸さると云ふ身分ではございませぬ、又ソレか
 貸さしさい金を私くしが御賈い申す譯はあし、是は何か恐れ入
 ましたこととございませぬが帝様が御考へ違ひではございませぬ
 まいか、日本銀行からでも借たんでございませぬ 敬徳馬鹿を
 申せ 相良「何處から借たかソレは知りませぬけれど私くし
 は貸した覚えはございませぬ 敬徳成はどソレは尤もでもあ
 る、唯一様では分るまい、皇帝過日能宮城よりして尙は冥土に暫
 らく御滞在に相成つた、閻魔王の許に御出遊はしたことがある
 相良「へエーさうでございませぬか、彼方は好いと云ふ証しを聞き

ましたが御歸りになつてからまた聞かぬのでございませぬが
 敬徳如何にも其時に冥土へ御出にあつて段々閻羅王に會つて
 冥問を遂げたる所が唯幾ろくべきことは其方共十年の間行
 ずむ僧に施こしを出し、又供養回向に財を抛ち貢しき中に今日
 まで佛へ送つたる金子積り積つて十三庫に充ちたり。十三庫と
 申しませぬと恐らくは七八十兩と云ふことに茲に仮定して申
 上げませぬ 敬徳帝はソレを聞き召して悉く其方共の善賢な
 る所を御喜こびあつて其金は即ち冥土に納め佛の御手許に之
 を納めると雖も貢しき中に右様の善事がある、其方等夫婦へ
 歸して之を返さねば相成らざる由會談を遂げたる後、今日敬徳
 を以て即ち此十三庫に對する金を其方共へ返す致す速やかに
 之を受納を致して宜しからう 相良「へエー、御氏來て呉ん
 ぶ大勢あことが出来て仕舞つた、お前と二人で移いで或は八文

西遊記

十二文と手の内を出した、ソレが數十年で積り積つて十三庫に
充ちたと云ふのた、ソレを帝様が可哀想に錢の無い中にさう云
ふことをしたんだから返してやると仰有るんだが返して頂い
ちやア何にもあらねへ 張氏ソレは往けませんよ、受取るこ
が出來ませんネ 相良エ、恐入ましたが是は御斷り申しませ
ソレを受取た日には數十年の間私くし其が御を祈りました甲
斐がございません、戴きましたも同様でございませから何うか
御持歸りを願ひたう存じませ 敬徳イヤ何と言つても私も使
者として此所へ参りたるからは是は受取つて呉れんければ
徳武使者の任を全たうすることが出來ん、相良夫婦何うぞ是は
経げて受取つて貰ひたいもんだ 相良折角の仰せでございま
そがソレは往けません、何うしまして十三庫あんで、其様に金を今
取つた所で私くし其やりやうがございません、受取れば參

西遊記

つた旅僧にでも又皆んなやつて仕舞うんですが持つてつて呉
れは宜うがそが持つてかまいと此金のある爲めに私くし其
は仕事をすることが出來ません、錢も無ければ金も無いから朝
も早く起きて女房は女房が稼ぎに行き、私くしは水を汲んで方
々へ配つて歩く家を開放して出て行つたつて泥棒や何か道入
りやア致しません、斯うやつて澤山金があると云へば泥棒が
來て私くし其やうないとは言ひませんが併し事に依つて心得
並ひの泥棒は殺しても持つて行かうと云ふ奴が世の中にはど
さいませ、金故に命を取られると云ふとどが度々新聞にも出て
居ります、御香あことでございませから思召しは誠に有難うと
さいませが何うぞ是は常へ御返しあそつて下さいまし 敬徳
ソレは往けあい 相良往けあいつたつて持つて御出あそつた
つて私くしの方で受取れません、何んあことをしたつて受取る

西遊記

やうき私くしちやアございません、貴所にやア濟みませんが御
 持ちあすつて下さい一寸懐中へでも入れて……敬徳十三庫
 の金が懐中へ進入るか、張氏此様なことをして居ると私くし
 は、燐寸の箱を二つでも三つでも張掛あつて仕舞ひませ、ネーか
 前さん相良、ウーム、張氏此様お人に掛はさいで横になつて
 身体を御休めお明日又水を汲まなければならぬから、相良、
 大きにさうだ、エー旦那御免なさい、一寐入り致しませから、と横
 にあつて仕舞つた、敬徳驚ろいた世の中に淡白な奴があるもん
 た、ゴロ、寐して仕舞つた女房は向ふをむいて、横りに燐寸の箱
 を張り始めた、之を見て流石は帝の思召しに川ふだけあつて敬
 徳は、遠ばれお人物、敬徳然らば斯様致と立歸つて一應其事を
 帝へ奏聞をさるから……相良、奏聞をさるとも大門へ進入ら
 うども勝手になさい、持つてつて呉れなければ困りませよ、寐る

西遊記

このが出来ないから……敬徳ソレは番のものを寄越そから
 相良、番の者を寄越せば宜しうございませ、番の者に此方で物
 を食はせることは出来ませんよ、幾人來たつて掛はねへから、番
 の者は自分で辨當でも持つて來て番をして居るが宜い、其中に
 グウー、寐して仕舞つた、敬徳滅に其正直ある所に感心をして
 其次第を申上げる然る所が太宗皇帝に於ても悉く御喜こび
 遊ばされ、何うも其相良と云ふ者は、遠ばれ又女房も中々の者で
 ある再び救命があつた、敬徳再び相良方へ参り、敬徳、救命に從
 はされば、逆勅の罪と云ふて其時には其方等二人首を斬られる
 一命を絶たれるから之を頂戴しろ、相良滅相おこと、逆勅で
 も御猪口でも其様なことは掛ひません、貴ふべきものではござ
 いません、貴ふべきものでないのを、ソレを受取らぬいからと、言
 つて首を斬られるのは仕方がない、斬られて仕舞はうか、張氏、

ソレも宜いネ 良相ソレでは貴所首を斬られる方にして下
 い。亂暴な奴だ再三奏聞をせると帝聞し召されて、一旦御遣はし
 になうたものでございませから、今更ら金庫に納めることは出
 来ない、ト云つて無理にやる譯にも参りません、幾ら帝でも人
 には人の権利のありませるもの、ソレより大勢の役人評議をし
 て然からば茲に一大寺院を建立したらば却へつて是れは永遠
 の爲めにも相成らうと云ふことにあつて帝へ奏聞せると固よ
 りいたして佛法師依の御方でございませから之れに賛成遊そ
 ばされたることにして始めて此の時に造りましたるのが動
 建相國寺と云ふ七堂伽藍でございませ、即ち御寺を御建立に
 ありましたサア此の相國寺は出来たが此の相國寺へ運入るべ
 き所の住職普通大抵の者では之れへ對して直すと云ふこと
 にありません、所るが其頭かひ評判置き、まだ平若しと雖ども並

獎に於ては至たく貴僧なり、徳行の人ありと云ふことは世の人
 の知る所でございませるから帝に於ても是に御心付きに相成
 りました、相國寺の住職は即ち此玄獎へ仰せ付けられることに
 あつた、玄獎此時に喜ぶことば知る所でございませ、併し何人が此
 の出来を致しませることは知る所でございませ、其命の有難
 寺の住職に直るか開山ば何人かと思つて居りました所へ若年
 かが自ら身に對して之を命せられたることゆゑ其命の有難
 きを喜び茲に佛供養を致し、大いある施餓鬼を致すと云ふ
 ことになりませした、時は貞觀の十三年九月にありまして此施餓
 鬼をする施餓鬼の壇を築いて此所に念々帝に於ても臨幸在まして
 める、施餓鬼の壇を築いて此所に念々帝に於ても臨幸在まして
 法の庭に御進みに相成ると云ふことゆゑ、都の人民に於ては其
 當日を相待つて居りませ、然る所九月三日のこととてございまし